

(案)

札幌市高齢者支援計画 2024

高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画
・認知症施策推進計画

令和6(2024)～令和8(2026)年度

札幌市

はじめに

私たちのまち・札幌は、今や人口 197 万人を擁する大都市へと大きな発展を遂げましたが、令和 2 年（2020 年）をピークに人口が減少局面に転じ、今後は少子高齢化により一層進行することが見込まれています。

このような中、令和 2 年から感染が拡大した新型コロナウイルス感染症が市民の皆様の健康や生活に与えた影響など、市民の皆様を取り巻く保健・福祉・医療の課題は複雑化・多様化し、迅速な対応が求められるものもありますことから、行政だけでなく関係機関や市民の皆様などとの連携のもと、多くの取組を進めてきたところです。

今後は、さらなる高齢化を見据え、高齢者健康寿命の延伸に向けて市民の自主的な健康づくりや介護予防活動を推進していくほか、認知症高齢者など判断能力が十分ではない方も人格を尊重され、個性と能力を十分に発揮することができる共生社会の実現を目指すなど、年齢を重ねても誰もが希望と生きがいを持って、自分らしく暮らしていけるまちづくりを進めていくことが必要です。

そのため、札幌市ではこのたびの「札幌市高齢者支援計画 2024」より、「高齢者保健福祉計画」・「介護保険事業計画」に加え「認知症施策支援計画」を含む 3 計画を一体的に策定することといたしました。本計画期間中である令和 7 年（2025 年）には団塊の世代がすべて 75 歳以上の後期高齢者となり、その子ども世代がすべて 65 歳以上の高齢者となる令和 22 年（2040 年）もすでに間近に迫っている状況といえます。

このような札幌市の将来も見据えて、本計画より基本目標を「いくつになっても住み慣れた地域で希望と生きがいを持って自分らしく暮らし続けることができるまちづくり」と改め、中長期的な視点で地域包括ケア体制の深化・推進に向けて取り組むとともに、高齢者施策の総合的な推進と円滑な実施に努めてまいります。

さらには、大規模災害や未曾有の感染症といった大きな危機をともに乗り越えた市民の皆様や関係機関の方々と手を携え、誰もが札幌市民であることを誇れるまちづくりに引き続き力を尽くしてまいります。

本計画の策定にあたり、多大なるご尽力を賜りました札幌市介護保険事業計画推進委員会の委員の皆様をはじめ、貴重なご意見やご提案をいただいた市民の皆様や関係機関・団体の皆様に心から感謝申し上げます。

令和 6 年（2024 年）3 月

札幌市長 秋元克広



目 次

第1章	計画の策定にあたって	2
第1節	計画策定の趣旨	2
第2章	前計画の取組状況	10
第1節	指標の達成状況と評価	10
第3章	高齢者を取り巻く現状と課題	18
第1節	高齢者人口や世帯などの状況	18
第2節	高齢者の心身の状況と活動の状況.....	24
第3節	高齢者の生活と支援体制	38
第4節	家族介護者の状況.....	55
第5節	認知症高齢者の状況.....	62
第6節	要介護・要支援認定者と介護サービスの状況	71
第7節	介護サービス提供事業者の状況.....	87
第8節	介護保険制度運営の現状と今後の展開	97
第4章	計画の基本目標	104
第1節	基本目標	104
第2節	圏域の考え方	105
第5章	施策の体系と展開	108
第1節	施策の体系	108
第2節	施策の展開	112
<視点1>	安心して住み続けられる生活環境の整備	112
<視点2>	地域共生社会の実現に向けた支援体制の充実・連携強化	123
<視点3>	高齢者がいつまでも自分らしく生活できる地域づくり	132
<視点4>	認知症施策の推進（認知症施策推進計画）	147
<視点5>	超高齢社会においても持続可能な制度運営	160

第6章	介護サービスの見込み等	172
第1節	被保険者と要介護等認定者の現状と見込み	172
第2節	介護サービス全体の現状と見込み.....	175
第3節	居宅サービス・介護予防サービスの現状と見込み.....	177
第4節	施設・居住系サービスの現状と見込み	181
第5節	地域密着型サービスの現状と見込み	183
第6節	主な介護保険施設等の整備目標.....	185
第7節	地域支援事業、保健福祉事業の現状と見込み	188
第7章	事業費の見込みと保険料	196
第1節	介護保険制度の仕組みと財源	196
第2節	第1号保険料の所得段階区分	199
第3節	第1号保険料の減免制度	202
第4節	第1号保険料の額の設定	203
第8章	計画の推進体制	***
第1節	計画の推進体制	***
第9章	資料編	***
資料1	パブリックコメント手続	***
資料2	各種実態調査の実施.....	***
資料3	介護保険事業実績（平成12年度（2000年度）～令和5年度（2023年度））	***
資料4	まちづくりセンター所管区域別人口割合	***
資料5	介護サービス圏域別の利用者数見込み	***
資料6	介護サービス圏域別の地域密着型サービスの定員総数	***
資料7	用語解説.....	***

第1章

計画の策定にあたって

第1章 計画の策定にあたって

第1節 計画策定の趣旨

1 計画策定の背景と目的

札幌市では、平均寿命の伸びや出生率の低下により、少子高齢化が進み、高齢化率は令和5年（2023年）10月で28.5%となっています。令和3年度以降、市全体の人口が減少局面に入ったことから、さらに少子高齢化が加速することが見込まれ、令和12年（2030年）には市民の約3割が、令和32年（2050年）には約4割が65歳以上の高齢者となることが予想されています。

人口減少や少子高齢化は全国的な傾向であり、国においては、「高齢社会対策大綱」を策定し、これまでの65歳以上を一律に「高齢者」と見るのではなく、すべての年代の方々が希望に応じて意欲・能力を生かして活躍できる「エイジレス社会」を目指す、地域における生活基盤を整備し、人生のどの段階でも高齢期の暮らしを具体的に描ける地域コミュニティをつくる、技術革新の成果が可能にする新しい高齢社会対策を志向するといった高齢社会対策の基本的な考え方を示しています。

この度の「札幌市高齢者支援計画2024」（以下「本計画」という。）は、このような国の方針を踏まえるとともに、札幌市の現状や、いわゆる団塊ジュニアのすべてが65歳以上となる令和22年（2040年）といった札幌市の将来も見据え、中長期的な視点をもって「地域包括ケア¹」システムの更なる深化・推進を目指すものとします。

そのためにも、今期から「高齢者保健福祉計画」・「介護保険事業計画」に加え「認知症施策推進計画」を一体的に策定することとし、高齢者支援施策の総合的な推進と円滑な実施を位置付けるものとしています。

¹ 高齢者の心身の状態や生活状況と、その必要度に応じて医療・介護・介護予防・住まい・生活支援が一体的に提供される体制を構築し、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で、その有する能力に応じて自立した日常生活を営むことができるようにすること

2 計画の位置づけ

(1) 「高齢者支援計画」の策定根拠

本計画は、老人福祉法（昭和38年法律第133号）に基づく「市町村老人福祉計画」と介護保険法（平成9年法律第123号）に基づく「市町村介護保険事業計画」及び共生社会の実現を推進するための認知症基本法（令和5年法律第65号）に基づく「認知症施策推進計画」を一体的に策定する計画で、高齢者の福祉事業の供給体制の確保に必要な事項や、介護給付等対象サービス、地域支援事業の見込み量など介護保険事業の円滑な運営に際して必要な事項、認知症施策の推進に関する必要な事項を含みます。

(2) 市の総合計画、他の個別計画との関係性

本計画は、札幌市の総合計画である「第2次札幌市まちづくり戦略ビジョン」におけるまちづくりの重要概念である「ウェルネス（健康）」や「ユニバーサル（共生）」の推進にも資する個別計画であり、本ビジョンの基本的な方向に沿った高齢保健福祉分野の事業計画となります。

また、超高齢社会においては、保健福祉分野に限らず、札幌市が行う施策それぞれが、高齢化・高齢者を意識する必要があることから、本計画は、他の個別計画や施策などとも相互に調和のとれたものとしします。

特に、障がいや医療分野の個別計画と、これらの共通的な事項を横断的に定める「札幌市地域福祉社会計画2024」と連動させながら策定を進め、各施策に取り組んでいきます。

(3) 北海道の計画との関係性

本計画は、北海道が策定する「北海道高齢者保健福祉計画・介護保険事業支援計画」や、医療提供体制の確保を図るための「北海道医療計画」と整合性が確保されたものとなります。

3 関係部局との連携による計画の策定・取組の推進

札幌市では、保健福祉施策を総合的かつ効果的に推進するため、副市長を本部長として、関係局長により構成する「札幌市保健福祉総合推進本部」を設置し、この推進本部や、推進本部のもとに設置する関係部長による「高齢者保健福祉部会」において本計画の策定検討を行っています。また、計画の取組や事業の推進にあたっては、関係部局との連携をより一層深めながら庁内横断的に取り組んでいきます。

第1章 計画の策定にあたって

● 国の関係法令

<老人福祉法（抄）>

（市町村老人福祉計画）

第 20 条の 8 市町村は、老人居宅生活支援事業及び老人福祉施設による事業（以下「老人福祉事業」という。）の供給体制の確保に関する計画（以下「市町村老人福祉計画」という。）を定めるものとする。

2～6 略

7 市町村老人福祉計画は、介護保険法第 117 条第 1 項に規定する市町村介護保険事業計画と一体のものとして作成されなければならない。

8 市町村老人福祉計画は、社会福祉法第 107 条第 1 項に規定する市町村地域福祉計画その他の法律の規定による計画であつて老人の福祉に関する事項を定めるものと調和が保たれたものでなければならない。

9・10 略

<介護保険法（抄）>

（市町村介護保険事業計画）

第 117 条 市町村は、基本指針に即して、3 年を 1 期とする当該市町村が行う介護保険事業に係る保険給付の円滑な実施に関する計画（以下「市町村介護保険事業計画」という。）を定めるものとする。

2 市町村介護保険事業計画においては、次に掲げる事項を定めるものとする。

(1) 当該市町村が、その住民が日常生活を営んでいる地域として、地理的条件、人口、交通事情その他の社会的条件、介護給付等対象サービスを提供するための施設の整備の状況その他の条件を総合的に勘案して定める区域ごとの当該区域における各年度の認知症対応型共同生活介護、地域密着型特定施設入居者生活介護及び地域密着型介護老人福祉施設入所者生活介護に係る必要利用定員総数その他の介護給付等対象サービスの種類ごとの量の見込み

(2) 各年度における地域支援事業の量の見込み

(3)・(4) 略

3～5 略

6 市町村介護保険事業計画は、老人福祉法第 20 条の 8 第 1 項に規定する市町村老人福祉計画と一体のものとして作成されなければならない。

7・8 略

9 市町村介護保険事業計画は、地域における医療及び介護の総合的な確保の促進に関する法律第 5 条第 1 項に規定する市町村計画との整合性の確保が図られたものでなければならない。

10 市町村介護保険事業計画は、社会福祉法第 107 条第 1 項に規定する市町村地域福祉計画、高齢者の居住の安定確保に関する法律第 4 条の 2 第 1 項に規定する市町村高齢者居住安定確保計画その他の法律の規定による計画であつて要介護者等の保健、医療、福祉又は居住に関する事項を定めるものと調和が保たれたものでなければならない。

11 市町村は、市町村介護保険事業計画を定め、又は変更しようとするときは、あらかじめ、被保険者の意見を反映させるために必要な措置を講ずるものとする。

12・13 略

< 共生社会の実現を推進するための認知症基本法（抄） >

（都道府県認知症施策推進計画）

第12条 略

2 略

3 都道府県は、都道府県計画の案を作成しようとするときは、あらかじめ、認知症の人及び家族等の意見を聴くよう努めなければならない。

4 都道府県は、都道府県計画を策定したときは、遅滞なく、これをインターネットの利用その他適切な方法により公表するよう努めなければならない。

5 都道府県は、適時に、都道府県計画に基づいて実施する施策の実施状況の評価を行い、その結果をインターネットの利用その他適切な方法により公表するよう努めなければならない。

6 都道府県は、当該都道府県における認知症に関する状況の変化を勘案し、及び当該都道府県における認知症施策の効果に関する評価を踏まえ、少なくとも5年ごとに、都道府県計画に検討を加え、必要があると認めるときには、これを変更するよう努めなければならない。

7 第3項の規定は第5項の評価の結果の取りまとめを行おうとする場合について、第3項及び第4項の規定は都道府県計画の変更について、それぞれ準用する。

（市町村認知症施策推進計画）

第13条 市町村（特別区を含む。以下この項において同じ。）は、基本計画（都道府県計画が策定されているときは、基本計画及び都道府県計画）を基本とするとともに、当該市町村の実情に即した市町村認知症施策推進計画（次項及び第3項において「市町村計画」という。）を策定するよう努めなければならない。

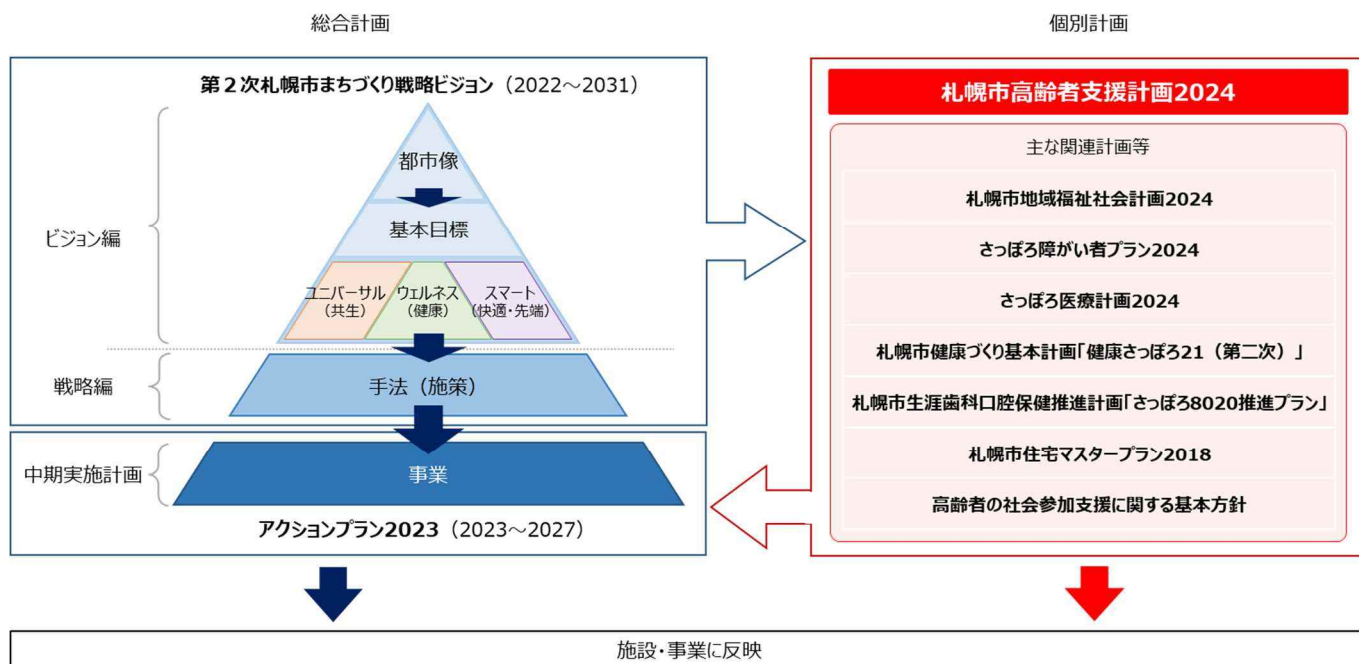
2 市町村計画は、社会福祉法第107条第1項に規定する市町村地域福祉計画、老人福祉法第20条の8第1項に規定する市町村老人福祉計画、介護保険法第117条第1項に規定する市町村介護保険事業計画その他の法令の規定による計画であって認知症施策に関連する事項を定めるものと調和が保たれたものでなければならない。

3 前条第3項から第7項までの規定は、市町村計画について準用する。

第1章 計画の策定にあたって

● 総合計画や他計画との相互関連性

総合計画との関連性



第2次まちづくり戦略ビジョンにおける「まちづくりの重要概念」

まちづくりの重要概念		
ユニバーサル(共生) 誰もが互いにその個性や能力を認め合い、多様性が強みとなる社会の実現	ウェルネス(健康) 誰もが生涯健康で、学び、自分らしく活躍できる社会の実現	スマート(快適・先端) 誰もが先端技術などにより快適に暮らし、新たな価値の創出に挑戦できる社会の実現

● 組織横断的に取り組む今日的課題

孤独・孤立対策

国において、人口減少や少子高齢化といった社会環境の変化や、地域社会における人と人とのつながりの希薄化、さらには新型コロナウイルス感染拡大の影響により、孤独・孤立の問題が顕在化してきたことを踏まえ、令和3年（2021年）12月に「孤独・孤立対策の重点計画」が策定されました。

また、令和5年（2023年）5月には「孤独・孤立対策推進法」が成立し、孤独・孤立状態にある方への支援等に関する取組について、その基本理念、国等の責務、施策の基本となる事項等が定められ、地方公共団体においても、地域の状況に応じた施策を実施することが求められることとなりました。

こうした国の動向を踏まえ、札幌市でも、国が示す孤独・孤立対策の基本的考え方に基づき取組を進めていく必要があることから、地域福祉、高齢者支援、障がい者支援、自殺対策、ひきこもり支援等の各分野に孤独・孤立対策の視点を入れ、各分野の取組を着実に進めるとともに、地域で孤立している方や支援を必要としている方への分野横断的な支援にも取り組んでいく必要があります。

ケアラー支援

少子高齢化や核家族化の進展といった社会構造の変化により、「老々介護」や「ダブルケア」など、家族介護を取り巻く課題が多様化している中で、今後、1人の家族介護者（ケアラー）にかかる負担は一層大きくなることを見込まれています。

北海道では、ケアラー支援に関する道民の理解を深め、介護に関する悩みや不安を抱える方を、それぞれの事情に合った支援につなぐことができるよう、「北海道ケアラー支援条例」を制定し、令和4年（2022年）4月に施行しているところです。この条例に基づき、令和5年（2023年）3月に策定された「北海道ケアラー支援推進計画」では、ケアラー支援に関する基本的な考え方や具体的な取組が示されるとともに、市町村においても、地域の実情に応じた相談支援体制を構築していくことが求められています。

また、札幌市においては、令和5年（2023年）1月に「ヤングケアラー支援ガイドライン」を策定し、児童福祉や高齢福祉、障がい福祉などケア対象者に関わる分野の関係機関が連携して、ヤングケアラーの発見や支援に取り組むこととしています。ケアラーとその家族が置かれている状況は様々であり、課題が複合化している場合もあるため、家族全体を支援するという理解のもとに、関係機関が連携して対応することが重要です。

札幌市では、北海道の条例や計画を踏まえながら、高齢福祉や障がい福祉など各分野における家族介護者（ケアラー）支援の充実、分野横断的な連携体制の構築に取り組みます。

4 計画の期間

本計画は、令和6年度（2024年度）から令和8年度（2026年度）までの3年間で計画期間として策定しています。

第2章

前計画の取組状況

第2章 前計画の取組状況

第1節 指標の達成状況と評価

1 各施策の取組と指標の達成状況

前計画（高齢者支援計画2021・計画期間：令和3年度（2021年度）～5年度（2023年度））では、高齢者保健福祉に関する施策を7つに分けて展開しました。また、各施策には、取組を評価するための指標を設定しました。

◆施策1 高齢者支援の基盤整備と社会参加の促進

指標設定の考え方	指標	令和元年度 現状値	令和4年度 目標値	令和4年度 達成状況
家族介護者の介護の負担感を示す指標	介護に何らかの負担を感じている家族介護者の割合	56.2%	50.0%	54.9% 要介護（支援）認定者 意向調査
高齢者が知識や経験を生かせる機会を示す指標	積極的に社会参加できる機会があると思う高齢者の割合	25.1%	35.0%	21.2% 高齢社会に関する 意識調査（65歳以上）
社会参加の機会に対する高齢者の意識を示す指標	地域活動の企画・運営側として参加したいと思う高齢者の割合	42.7%	45.0%	35.0% 高齢社会に関する 意識調査（65歳以上）

《主な取組等》

- 家族介護者負担軽減を考慮し、特別養護老人ホームの整備や地域密着型サービスの充実を推進
- 高齢者による介護施設等でのボランティアに対し、換金可能なポイントを付与する「介護サポートポイント事業」を実施
- 企業と就業を希望する高齢者のマッチングを図る体験付き仕事説明会「シニアワーキングさっぽろ」を開催

第2章 前計画の評価

《指標達成状況に対する評価》

- 家族介護者の介護負担を示す指標については、概ね横ばいで、半数近くの家族介護者が介護に何らかの負担を感じています。

介護する方も介護される方もその状況やニーズは様々ですが、引き続き相談体制の充実強化や施設整備に努めるとともに、介護保険サービスのみならず、地域の支え合いなど、家族介護者の孤立を防ぐ地域づくりを進めていく必要があります。

- 高齢者の社会参加や主体的に地域活動に参画するという指標については、ともに目標値を下回っていますが、コロナ禍の影響から外出機会の減少により活動が制限されていたことが考えられます。

今後は、感染症予防などに留意しながらも、高齢者が積極的にかつ主体的に社会参加できるようなきっかけづくりや仕組みを構築していく必要があります。

◆施策2 地域の連携強化と地域共生社会の実現

指標設定の考え方	指標	令和元年度 現状値	令和4年度 目標値	令和4年度 達成状況
地域における相談体制の充実を示す指標	生活や健康福祉に関して困っていることや相談したいことの相談先がない高齢者の割合	12.2%	10.0%	12.6% 指標達成度調査
医療との連携に対する介護支援専門員の意識を示す指標	医療との連携に対して困難や不安を感じている介護支援専門員の割合	38.2%	31.0%	32.7% 介護保険サービス提供事業者調査

《主な取組等》

- 地域包括支援センターの機能強化や、各関係機関による相談支援の実施を推進
- 複合的な課題や制度の狭間の課題を抱える世帯に連携して対応する支援の取組を推進するため、支援調整室を区役所に設置・拡大
- 医師会等関係機関との連携により多職種協働の研修や協議の場を設け、在宅医療・介護連携を推進

《指標達成状況に対する評価》

- 困りごとを相談する相手がいない高齢者という指標については、概ね横ばいとなっており、相談先の周知はもとより、相談したくない、相談する必要がないと感じている高齢者にアウトリーチを行うなど、一人ひとりに寄り沿った支援を展開していく必要があります。

また、地域共生社会の実現のためには、地域や関係機関とのネットワークが重要であることから医療と介護の連携についても一層取り組んでいく必要があります。

◆施策3 介護予防・健康づくり施策の充実

指標設定の考え方	指標	令和元年度 現状値	令和4年度 目標値	令和4年度 達成状況
住民主体の介護予防活動状況を示す指標	介護予防のための通いの場に参加していない高齢者の割合	58.9%	58.0%	64.8% 高齢社会に関する意識調査 (65歳以上)
高齢者の主観的な健康状態を示す指標	健康を自覚する高齢者の割合	69.3%	70.0%	67.5% 高齢社会に関する意識調査 (65歳以上)
高齢者が自立して過ごせる期間を示す指標	初回要介護等認定時の平均年齢	平均 79.6歳	現状維持	平均 80.0歳 保健福祉局調べ

《主な取組等》

- 介護予防センターを中心に、地域における介護予防活動を推進
- 地域における介護予防活動に関心のある高齢者や従事者に対し、リハビリテーション専門職等による技術支援を実施

《指標達成状況に対する評価》

- 介護予防活動を示す指標や健康を自覚する高齢者の割合は、ともに目標を達成しておらず、コロナ禍の影響によることが考えられます。

活動制限が解かれた状況ではありますが、一方で新型コロナウイルス感染症の状況も踏まえながらの介護予防活動や健康づくりの展開が求められています。

第2章 前計画の評価

◆施策4 認知症施策の推進

指標設定の考え方	指標	令和元年度 現状値	令和4年度 目標値	令和4年度 達成状況
認知症サポーターの養成状況を示す指標	認知症サポーター養成講座の延べ受講者数	累計 122,386人	累計 130,000人	累計 136,775人 保健福祉局調べ
認知症の相談先の認知度を示す指標	認知症の相談窓口を知っている高齢者の割合	17.6%	18.5%	21.1% 高齢社会に関する 意識調査 (65歳以上)

《主な取組等》

- 認知症を理解し、認知症の方とその家族を地域で見守り支える「認知症サポーター」を養成
- 認知症介護従事者などの専門職が認知症に関する相談対応や、必要に応じて関係機関の支援につなぐ「認知症コールセンター」を運営

《指標達成状況に対する評価》

- 認知症サポーターの養成数は目標を大きく上回っています。今後は令和5年6月に成立した「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」を踏まえ、認知症を正しく理解し、地域の中で認知症の人と家族を支える役割を担う認知症サポーターの活動の場を拡げ、認知症の人と家族にやさしい地域づくりを一層進めていく必要があります。

また、認知症の相談先の認知度を示す指標については、目標を上回っていますが、より多くの高齢者に広く認知していただくため、今後も引き続き周知に努めていく必要があります。

◆施策5 人材確保と業務効率化の取組

指標設定の考え方	指標	令和元年度 現状値	令和4年度 目標値	令和4年度 達成状況
介護人材の採用状況を示す指標	介護人材確保促進事業等に参加した事業者のうち希望どおりに採用できた事業者の割合	—	35.0%	40.0% [※] 保健福祉局調べ

※ 令和3年度（2021年度）実績

◆施策6 災害・感染症対策の体制整備

指標設定の考え方	指標	令和元年度 現状値	令和4年度 目標値	令和4年度 達成状況
災害や感染症発生時においてもサービス提供が可能な体制の整備を示す指標	災害に対応した事業継続計画（BCP）を策定している介護保険施設等の割合	—	100.0%	49.1% 介護保険サービス提供事業者調査
	感染症に対応した事業継続計画（BCP）を策定している介護保険施設等の割合	—	100.0%	48.1% 介護保険サービス提供事業者調査

《主な取組等》

- 介護従事者を対象とした採用力向上オンラインセミナーや特設サイトの開設、介護の仕事に興味のある市民向けのオンラインイベント等を実施
- 介護サービス事業者集団指導及び実地指導を通じ、事業継続計画（BCP）の策定を促進

《指標達成状況に対する評価》

- 介護人材の確保と業務効率化の取組及び災害・感染症対策の体制整備に係る指標については目標を達成したものもありますが、達成状況が思わしくなかった状況のものもあります。

介護サービス事業の体制整備は高齢者支援に直結するものであることから、様々な機会を捉え、多様な手法で介護サービス事業者へ継続的に支援を行っていくことが必要です。

◆施策7 安定した介護保険制度の運営

指標設定の考え方	指標	令和元年度 現状値	令和4年度 目標値	令和4年度 達成状況
保険給付の適正化を示す指標	縦覧点検・医療情報との突合により、過誤調整を行った件数	延べ 1,947件	延べ 1,900件	延べ 1,981件 保健福祉局調べ
生活支援におけるインフォーマルサービス ² の利用意向を示す指標	訪問型サービスで提供される生活支援についてインフォーマルサービスを活用しても良いと思う要支援認定者（事業対象者）の割合	48.7%	50.0%	48.1% 要介護（支援）認定者 意向調査

《主な取組等》

- 介護給付と医療給付の請求情報を突合し、重複請求などの不適切な請求について点検を実施
- 日常生活圏域に第2層の生活支援コーディネーターを配置し、多様な担い手や社会資源をコーディネート

《指標達成状況に対する評価》

- 保険給付の適正化に資する指標は目標を達成しておらず、引き続き持続可能な円滑な介護保険制度の運営に努めていく必要があります。

2 今期に向けて

前計画では「いくつになっても住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるまちづくり」に向けて様々な取組を進めてきましたが、令和2年1月に国内で初めての患者が確認された新型コロナウイルス感染症の拡大により、人と会うことが制限され、人との距離を取ることが求められました。とりわけ、高齢者の感染はハイリスクとされ、高齢者を対象とする多くの保健福祉事業が中止や延期に追い込まれましたが、何よりも、当該感染症が第5類に移行した令和5年5月までの約4年間で「他人と接しない」という行動様式が高齢者の心身に与えた影響は計り知れません。

高齢者支援計画2024では、前計画の内容を引き継ぎつつ、後述する高齢社会に関する意識や要介護等認定者の意向調査などの結果を踏まえ、コロナ禍が高齢者に与えた影響などの新たな課題についても対応しながら、取組を進めていきます。

² 公的機関や専門職による制度に基づくサービスや支援（フォーマルサービス）以外の支援のこと。具体的には、家族、近隣、友人、ボランティア、住民同士などの制度に基づかない援助などのこと

第3章

高齢者を取り巻く現状と課題

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

第1節 高齢者人口や世帯などの状況

1 現状について

(1) 人口と高齢化率

令和5年(2023年)10月1日現在の札幌市の総人口は1,958,199人で、このうち65歳以上の高齢者は557,174人であり、高齢化率は28.5%となっています。

札幌市の人口構成【年齢別、男女別】

	人口(人)	割合	男性(人)	女性(人)	性比※
総人口	1,958,199	100.0%	915,649	1,042,550	87.8%
0～14歳	207,555	10.6%	106,467	101,088	105.3%
15～64歳	1,193,470	60.9%	577,561	615,909	93.8%
65歳以上	557,174	28.5%	231,621	325,553	71.1%
65～74歳	265,613	13.6%	122,234	143,379	85.3%
75歳以上	291,561	14.9%	109,387	182,174	60.0%

※ 性比とは女性を100としたときの男性の比率

資料：札幌市まちづくり政策局「住民基本台帳」(令和5年(2023年)10月1日現在)

また、高齢化率は、北海道、全国と比べて低い状況にありますが、今後は75歳以上の後期高齢者が増え、団塊ジュニア世代が65歳以上になる令和22年(2040年)には4割に迫ることが見込まれています。

他都市の高齢化率の現状

	高齢化率
政令指定都市平均	26.5%
北海道	32.5%
全国	28.9%

資料：総務省「国勢調査」

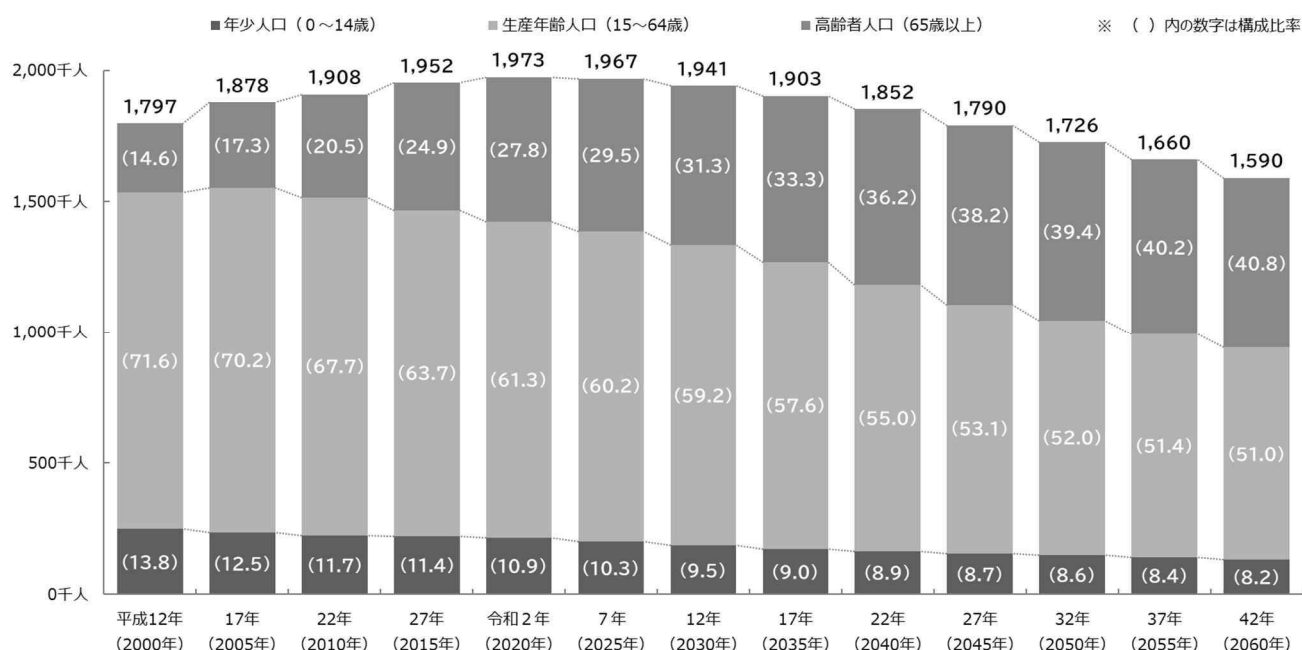
国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」
(令和5年(2023年))

◆少子高齢化は今後も進行

札幌市の高齢化率は、令和12年(2030年)には31.3%、令和22年(2040年)には36.2%、令和32年(2050年)には39.4%まで上昇していくことが見込まれます。

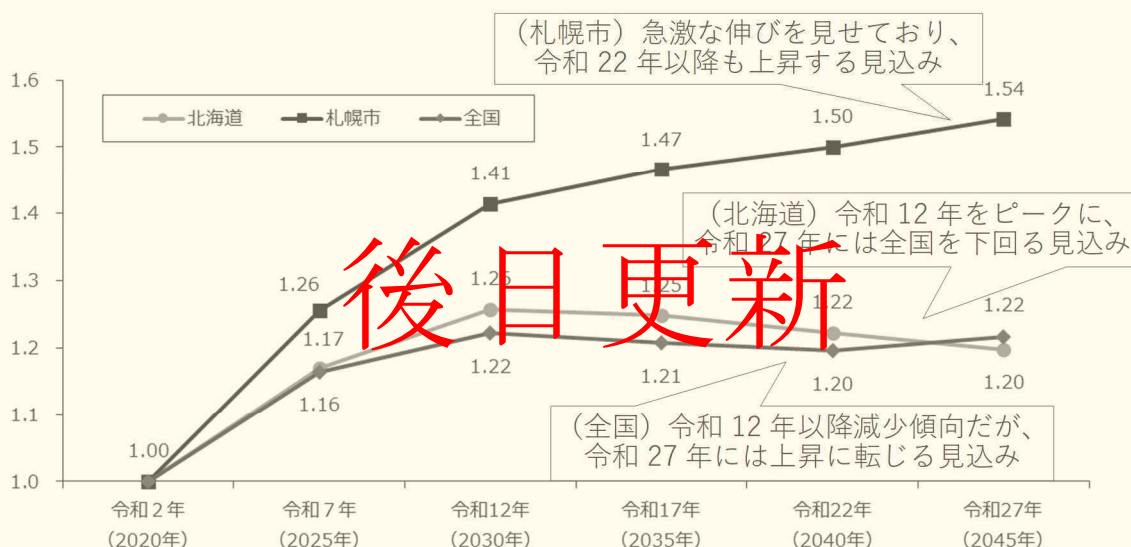
総人口の減少と少子高齢化はますます進行し、生産年齢人口の割合も減少していきます。

札幌市の人口と高齢化率の将来見通し



資料：総務省「国勢調査結果」(平成12年(2000年)～令和2年(2020年)、各年10月1日現在)
札幌市まちづくり政策局推計(令和7年(2025年)～42年(2060年)、各年10月1日現在)

75歳以上人口の将来見通し(令和2年(2020年)を1としたときの指数)



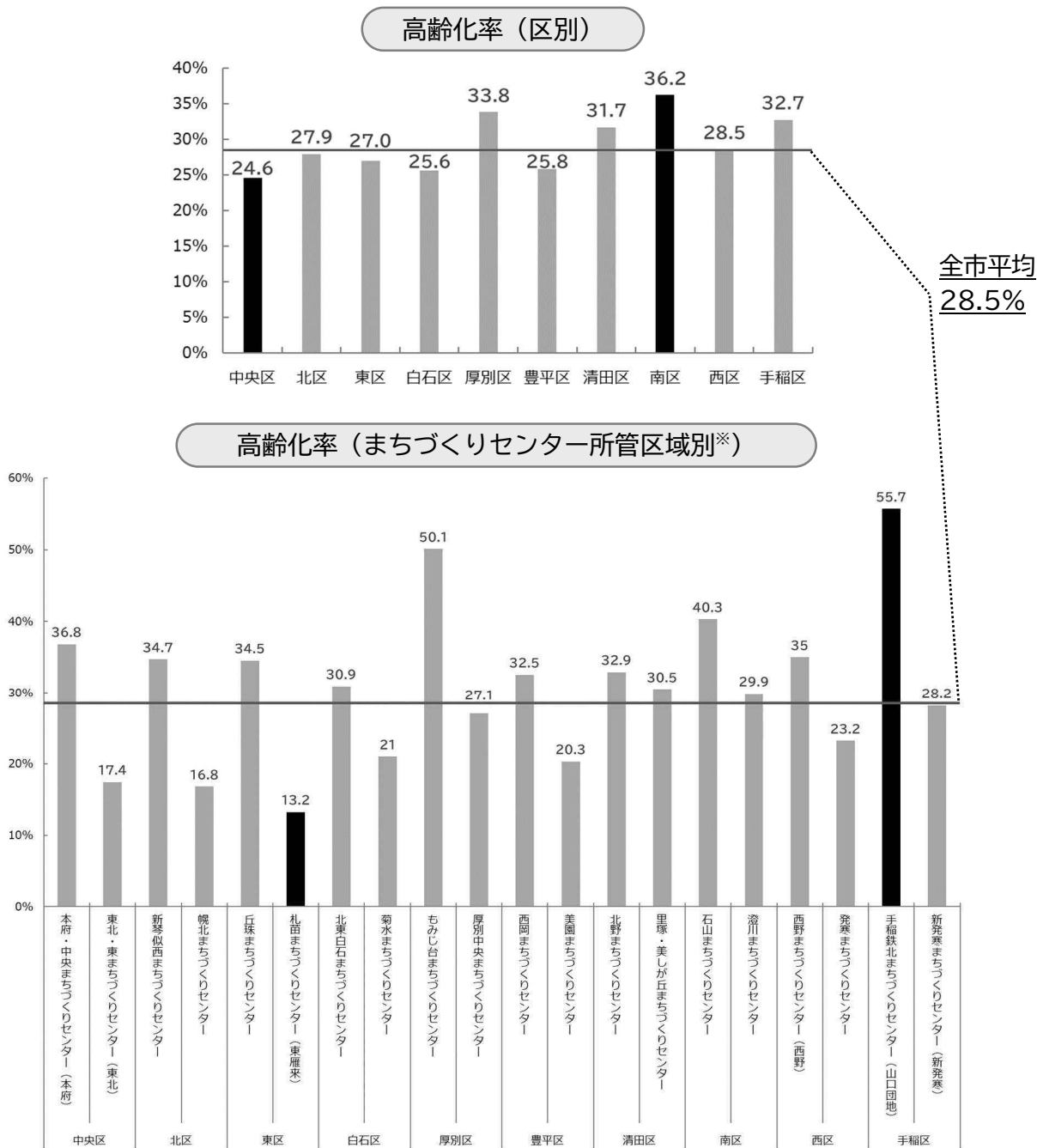
資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」(平成30年(2018年)3月推計)をもとに作成

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆区別の高齢化率には最大で11.6ポイントの差

地域ごとの高齢化率を比べると、最も高い南区で36.2%、最も低い中央区で24.6%となっています。

さらに、まちづくりセンター所管区域ごとに比較すると、地域によって最大で42.5ポイントの差が出ており、同じ札幌市内でも地域によって高齢化率には大きな違いがあることがわかります。



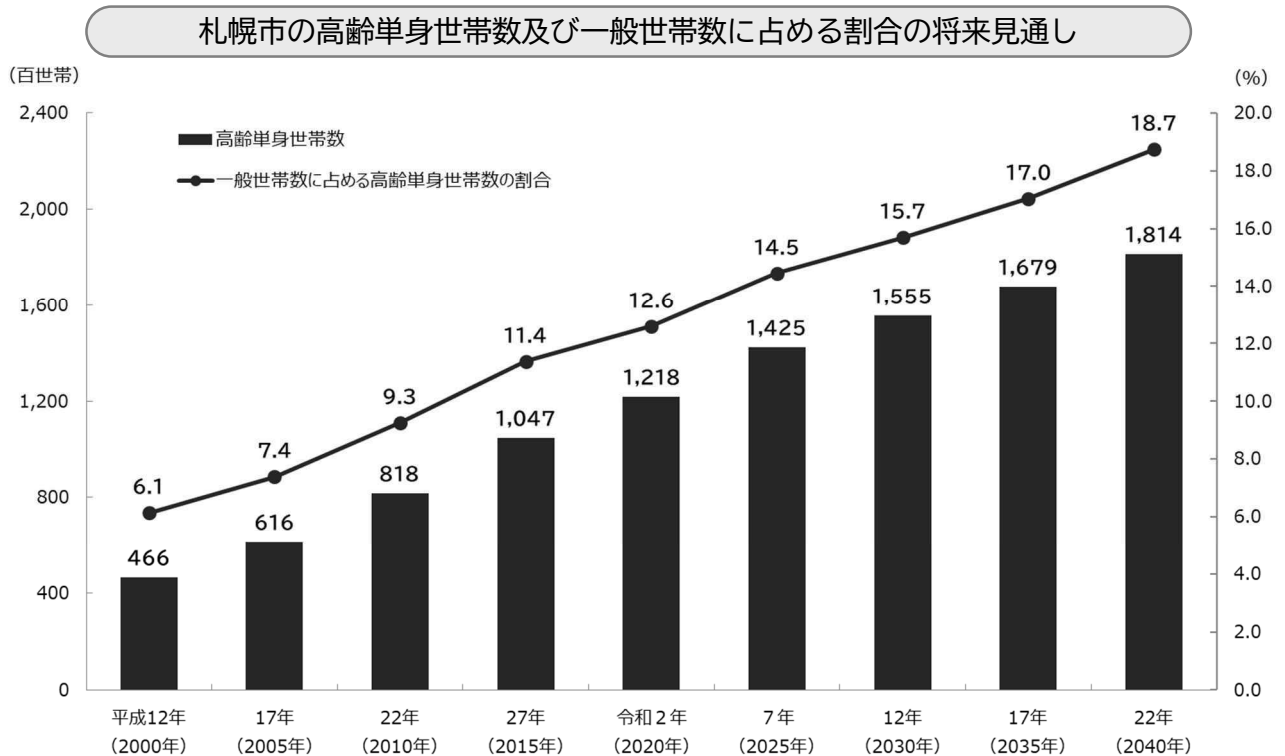
※ 各区のまちづくりセンター所管区域における高齢化率が最大と最小の区域をそれぞれ抜粋

資料：札幌市まちづくり政策局「住民基本台帳」（令和5年（2023年）4月1日現在）

(2) 世帯の状況

◆ 高齢単身世帯や高齢夫婦世帯が一般世帯に占める割合は年々増加

札幌市における高齢単身世帯数は年々増加しており、一般世帯数に占める割合は、令和22年（2040年）には18.7%となり、おおむね5世帯に1世帯が高齢単身世帯となることが見込まれています。



資料：総務省「国勢調査」平成12年（2000年）～27年（2015年）、各年10月1日現在
 札幌市まちづくり政策局推計（令和2年（2020年）～22年（2040年）、各年10月1日現在）

札幌市の高齢夫婦世帯（夫65歳以上、妻60歳以上の夫婦のみの世帯）は、令和2年（2020年）は110,890世帯で、一般世帯に占める割合は11.4%となっており、平成27年（2015年）に比べ21,230世帯増加しています。

札幌市の高齢夫婦世帯の推移

	平成27年 (2015年)	令和2年 (2020年)
高齢夫婦世帯数	98,660世帯	110,890世帯
一般世帯に占める割合	10.7%	11.4%

資料：総務省「国勢調査」（平成27年（2015年）、令和2年（2020年））

(3) 高齢者の道内移動の状況

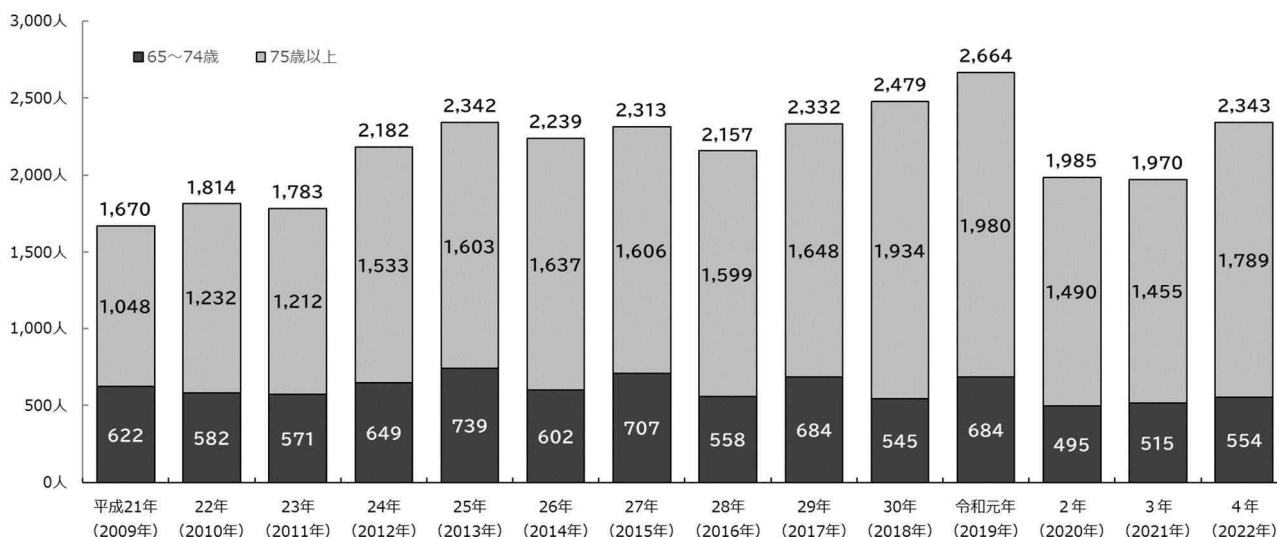
◆道内他市町村から札幌市への転入超過数は増加の傾向

高齢者の道内移動は、平成24年（2012年）以降7年連続で道内他市町村から札幌市への転入超過（転入者が転出者を上回る状態）が2千人を超える状況が続いていました。

令和2・3年には新型コロナウイルスの影響等により大幅な減少が見られましたが、直近の令和4年（2022年）中の高齢者の転入超過数は2,343人と、再び増加の傾向にあることがわかります。

また、年齢別に見ると、転入超過数全体の増減に関わらず、75歳以上の転入者の割合が多い傾向が続いています。

高齢者の道内からの転入超過数の推移



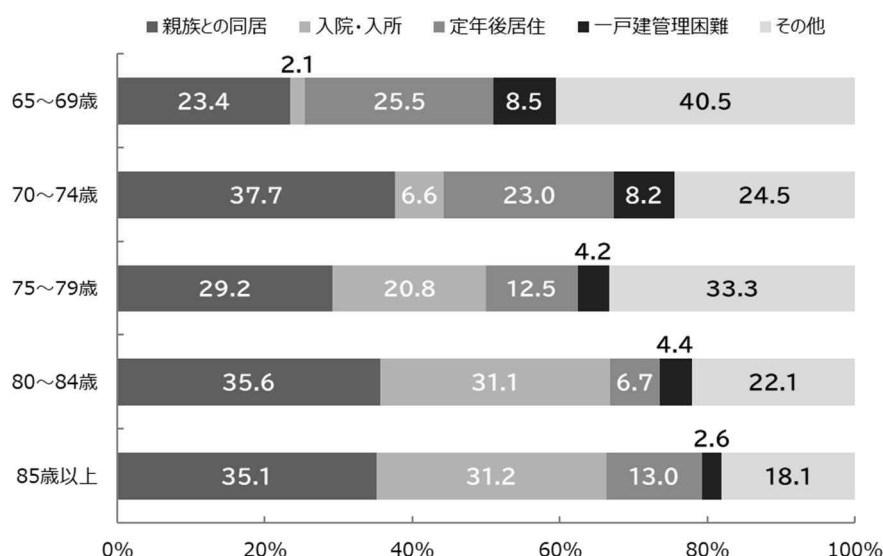
資料：札幌市まちづくり政策局「住民基本台帳」
 （平成21年（2009年）～令和4年（2022年）、日本人のみ）

◆高齢者が道内各市町村から転入する主な理由は家族・親族との同居

令和3年度（2021年度）の「札幌市人口移動実態調査」の結果によると、転入主因者が高齢者である世帯の市外からの転入理由としては、「定年退職後居住」が最も多い65～69歳を除くすべての年代で、「家族、親族との同居または近くに住民のため」が最も多くの割合を占めています。

また、高齢になるにつれて「入院・入所」を理由とした転入が増加する傾向にあることがわかります。

転入主因者が高齢者である世帯の市外からの転入の理由



資料：札幌市まちづくり政策局「札幌市人口移動実態調査」
(令和3年度（2021年度）)

2 今後の課題について

- これまで増加してきた札幌市の人口は減少局面を迎え、年少人口や生産年齢人口は減少する一方で、高齢者人口は増加し、人口構造にも変化が生じていくことが見込まれます。中でも特に、75歳以上の後期高齢者人口の増加が著しく、介護や支援を要する高齢者の増加が予想されます。

今後は、増大する医療や介護、支援のニーズに限られた資源で持続的に対応していくため、サービスや支援体制の在り方について検討していく必要があります。

第2節 高齢者の心身の状況と活動の状況

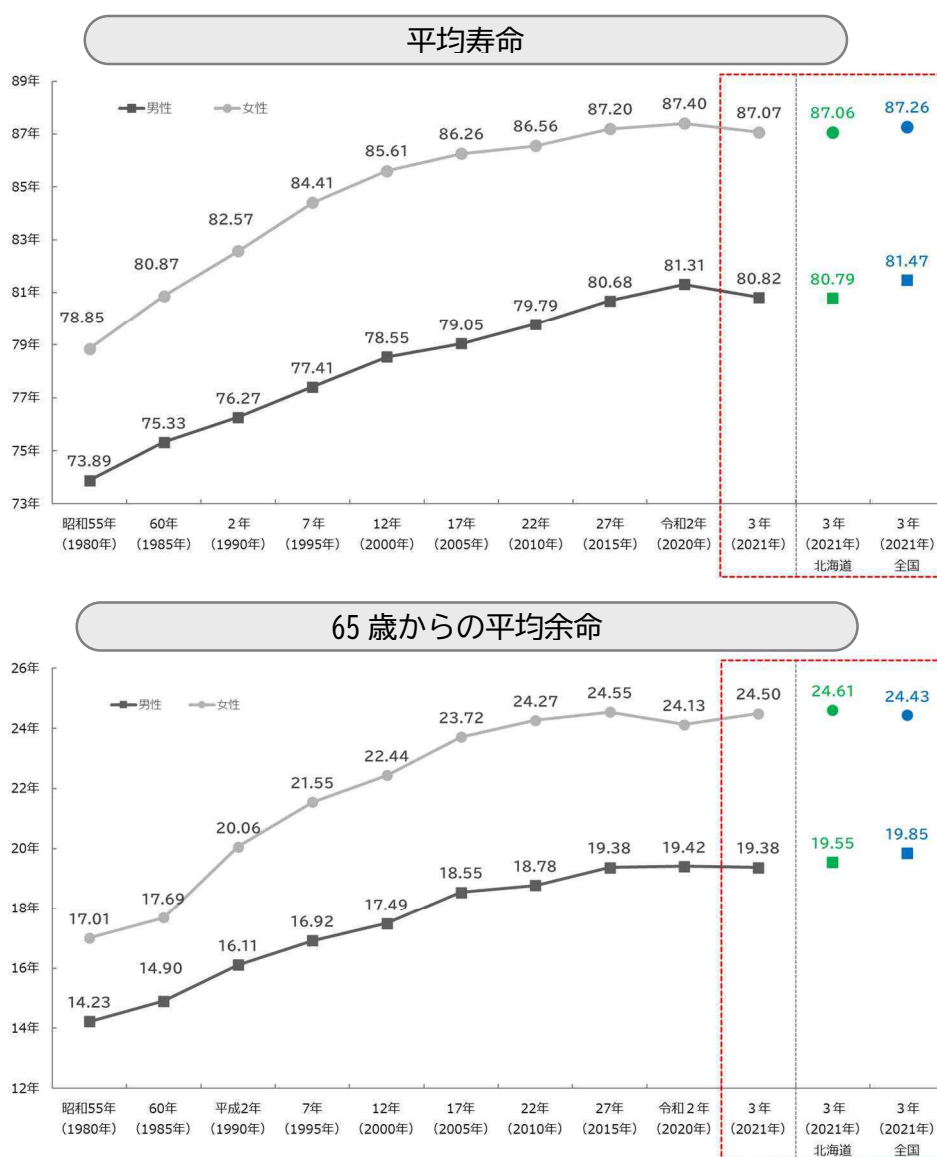
1 現状について

(1) 心身の状況

◆平均寿命と平均余命は伸びている

札幌市の平均寿命は、男女ともにここ50年程で10歳余り伸びており、直近の令和3年（2021年）では、男女ともに道内平均より高く、全国平均よりは低い状況にあります。

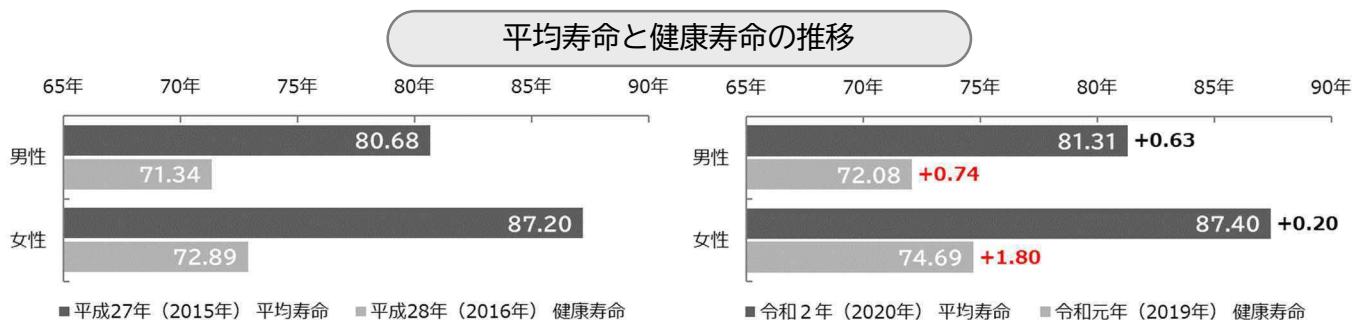
また、65歳からの平均余命も同様に男女とも延伸傾向にあり、直近で比較すると、札幌市、道内平均ともに、女性は全国平均よりも高く、男性は全国平均よりも低くなっています。



資料：厚生労働省、北海道保健福祉部、札幌市保健福祉局、札幌市まちづくり政策局

◆男女とも健康寿命は延伸し、平均寿命と比較しても伸びが大きい

直近の2時点における札幌市の平均寿命と健康寿命³の推移を見ると、男女ともに平均寿命も健康寿命も伸びており、特に、健康寿命の伸びが平均寿命の伸びを上回っています。



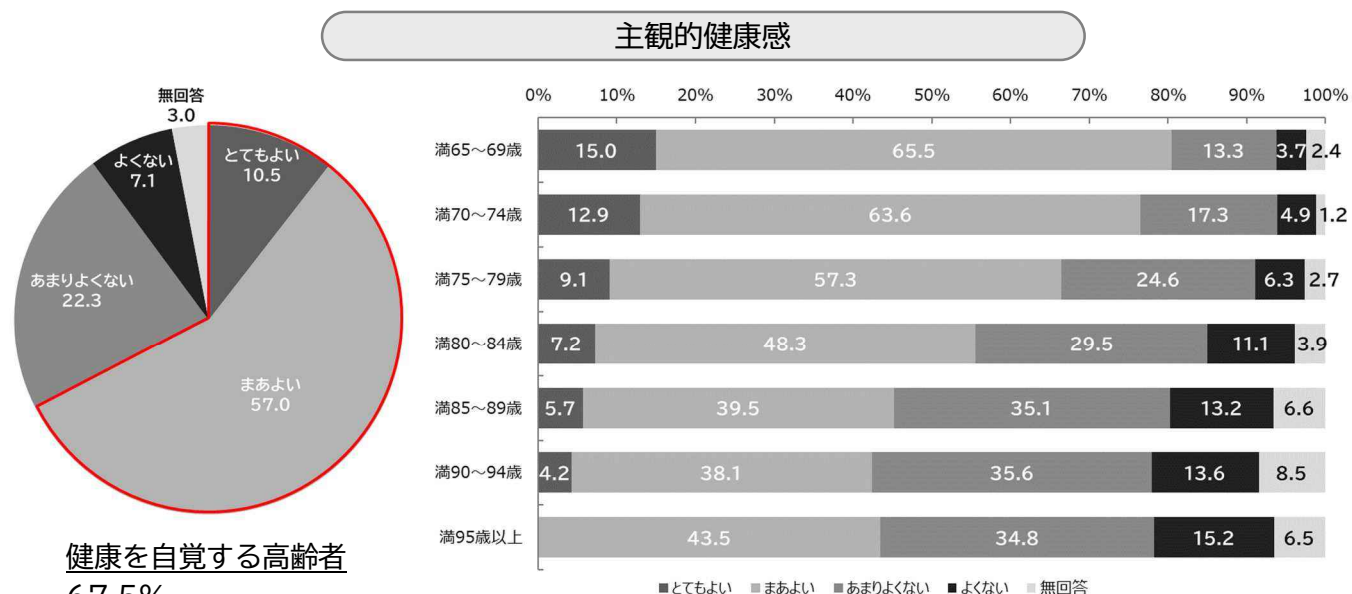
資料：平均寿命…厚生労働省「都道府県別生命表」(平成27年(2015年)、令和2年(2020年))
健康寿命…厚生労働科学研究「健康日本21(第二次)の総合的評価と次期健康づくり運動に向けた研究(令和元～3年度)」(平成28年(2016年)、令和元年(2019年))

※ 上記資料の平均寿命は5年ごと、健康寿命は3年ごとに公表されることから、ここでは、それぞれ現時点で公表されている最新値及び前回値を概ね同時点のものとし、みなすものとした。

◆多くの高齢者が健康を自覚している

主観的健康感については、高齢者全体で「とてもよい」、「まあよい」の回答の合計が67.5%と過半数を大きく超えています。

前期高齢者を中心に多くの年齢層で、半数以上の方が健康を自覚していますが、高年齢になるにつれてその割合が減少する傾向にあります。



資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査(65歳以上)」(令和4年度(2022年度))

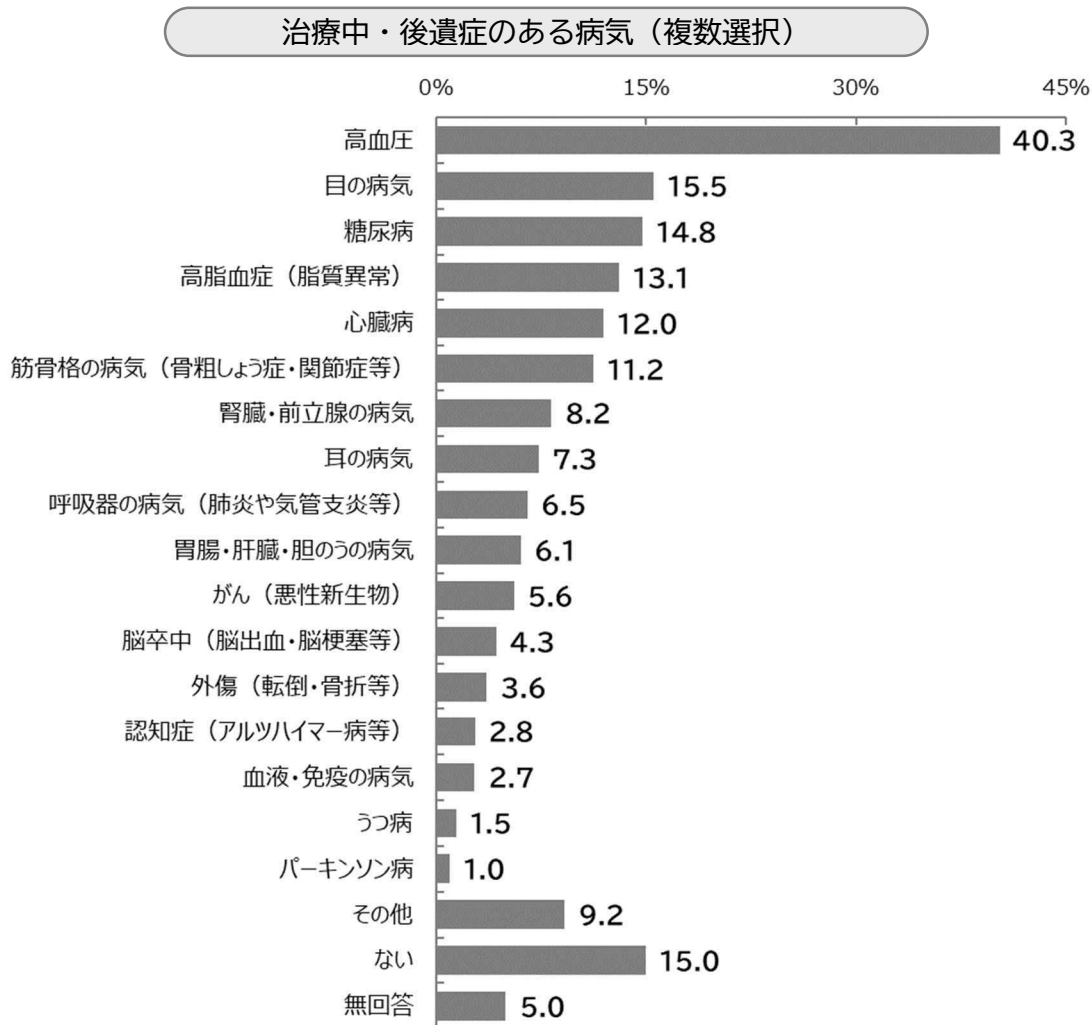
³ 健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆高齢者が抱える疾病としては生活習慣病が多い

現在治療中または後遺症のある病気については、「高血圧」が40.3%と最も多く、次いで「目の病気」が15.5%となっているほか、「糖尿病」や「高脂血症」、「心臓病」などの生活習慣病が上位に挙げられています。

一方で、「ない」とする方も15.0%と一定程度いることがわかります。



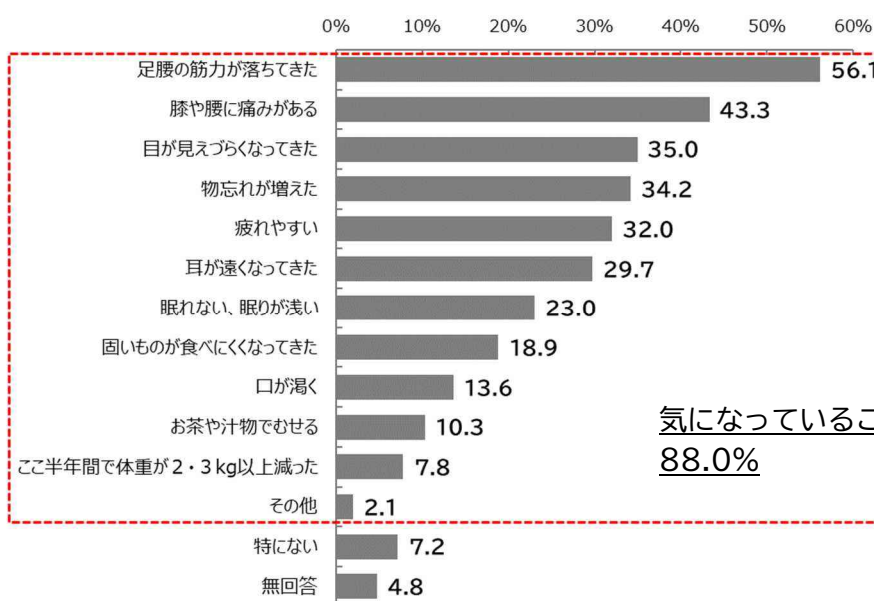
資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

◆多くの高齢者が健康維持に気を付けて行動している

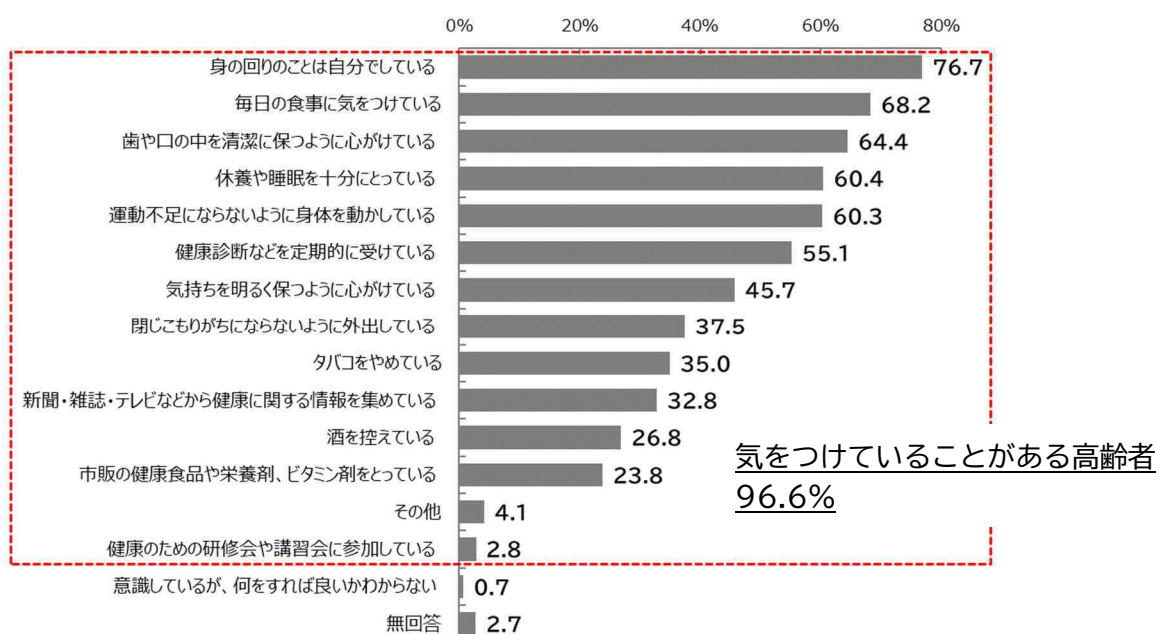
最近の健康状態で気になることとして、56.1%の方が「足腰の筋力が落ちてきた」、43.3%の方が「膝や腰に痛みがある」と回答しています。

一方、健康維持のために気を付けていることがあると回答した方は9割以上となっており、高齢者が健康状態で気になることがありながらも、健康維持に向け、何らかの行動につなげていることがわかります。

最近の健康状態で気になっていること（複数回答）



健康維持のために気を付けていること（複数回答）

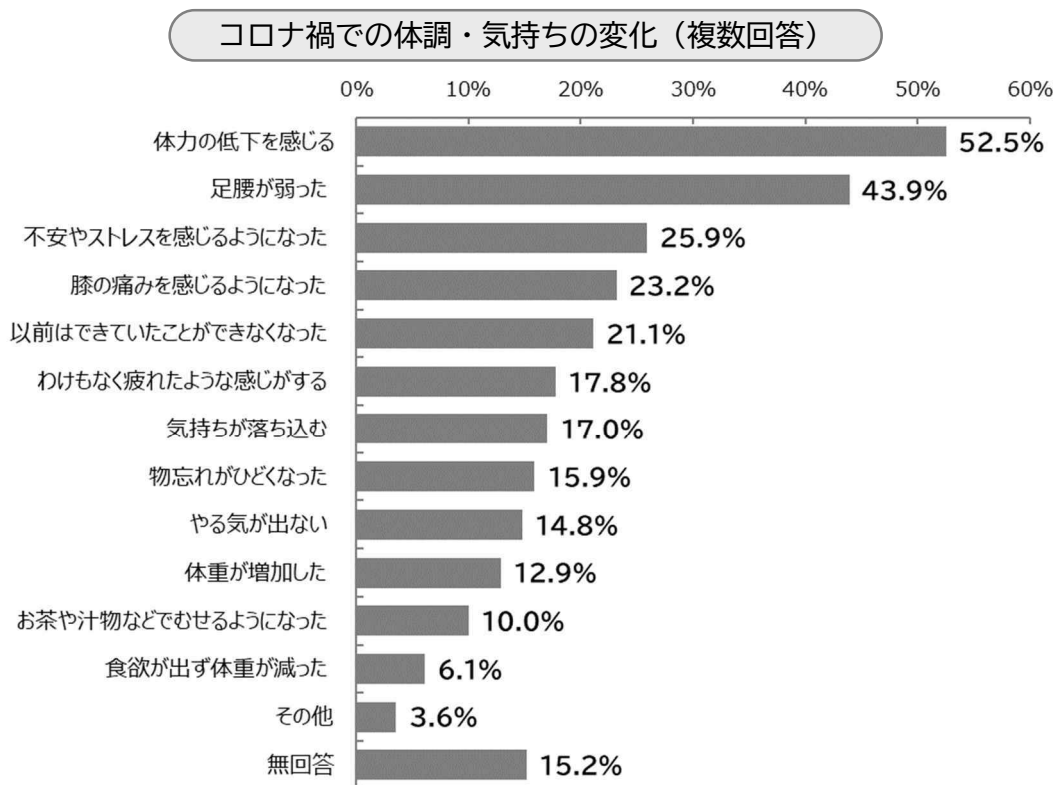


資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆多くの高齢者がコロナ禍の影響による心身の機能低下を実感

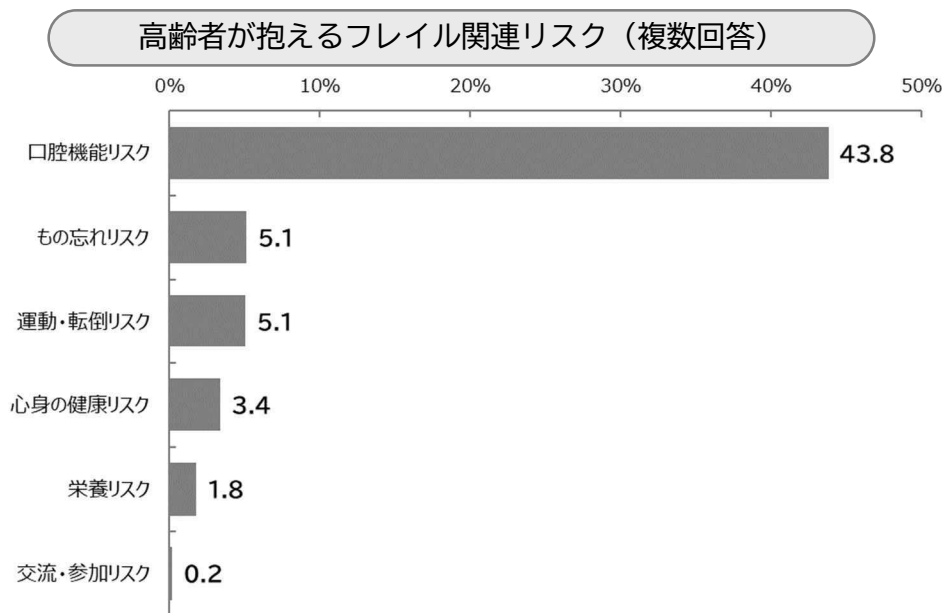
コロナ禍における体調・気持ちの変化については、「体力の低下を感じる」が52.5%、「足腰が弱った」が43.9%と、体調の変化を感じる高齢者が多いことがわかります。



資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年））

◆口腔機能にリスクを抱えている高齢者が多い

地域で介護予防活動に取り組む高齢者を対象に健康・身体状況のデータ分析を行い、6項目のフレイル関連リスク⁴を判定したところ、「口腔機能リスク」を抱える高齢者の割合が43.8%と、ほかのリスクから突出して高くなっていることがわかります。



※ 対象は、介護予防センターが支援する介護予防活動に取り組む高齢者4,329人

資料：札幌市保健福祉局「自立生活向上支援業務報告書」
(令和4年度(2022年度))

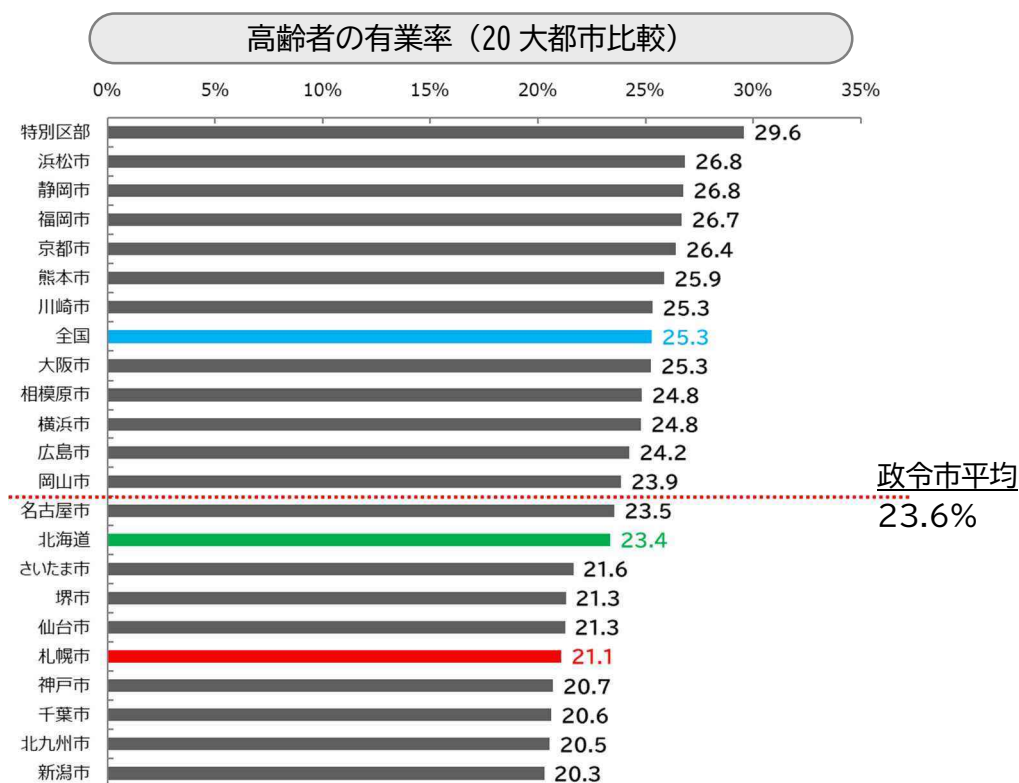
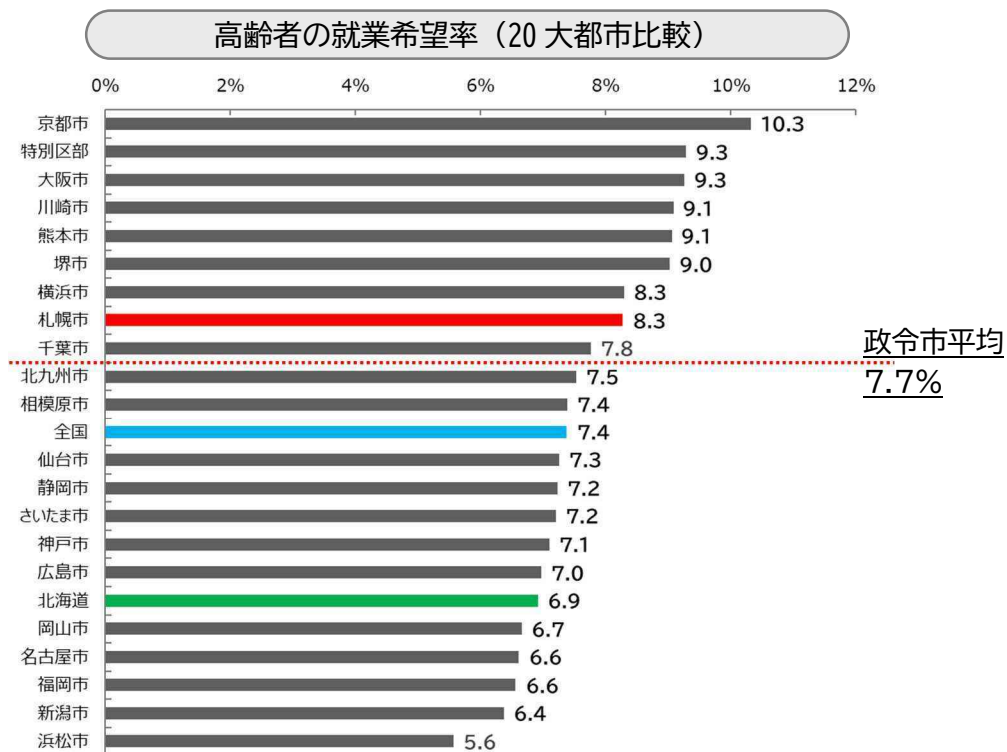
⁴ 厚生労働省が示す、フレイルなど高齢者の特性を踏まえて健康状態を総合的に把握することを目的として15項目の質問で構成される「後期高齢者の質問票」の質問項目における10の類型(健康状態、心の健康状態、食習慣、口腔機能、体重変化、運動店頭、認知機能、喫煙、社会参加、ソーシャルサポート)を参考に、フレイル関連リスク高齢者の判定基準として任意で設定したもの

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

(2) 社会参加や介護予防活動などの状況

◆就業意欲は高いが、有業率は低い

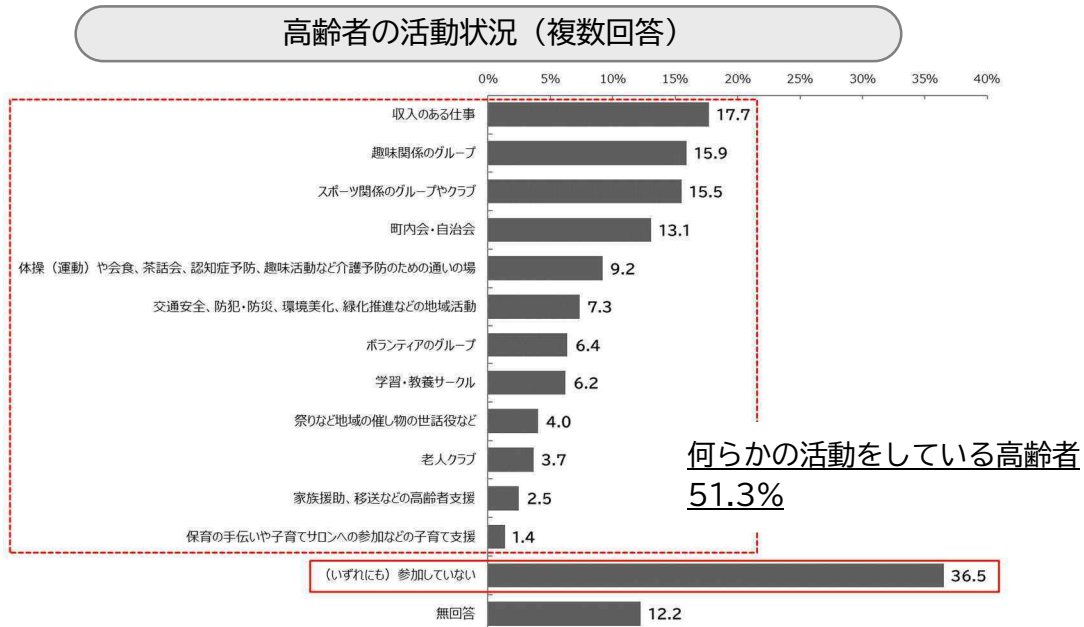
札幌市の高齢者のうち無業者の就業希望率を比較すると、全国・政令市平均をとともに上回っている一方で、高齢者の有業率は、全国・政令市及び北海道平均を下回り21.1%となっています。



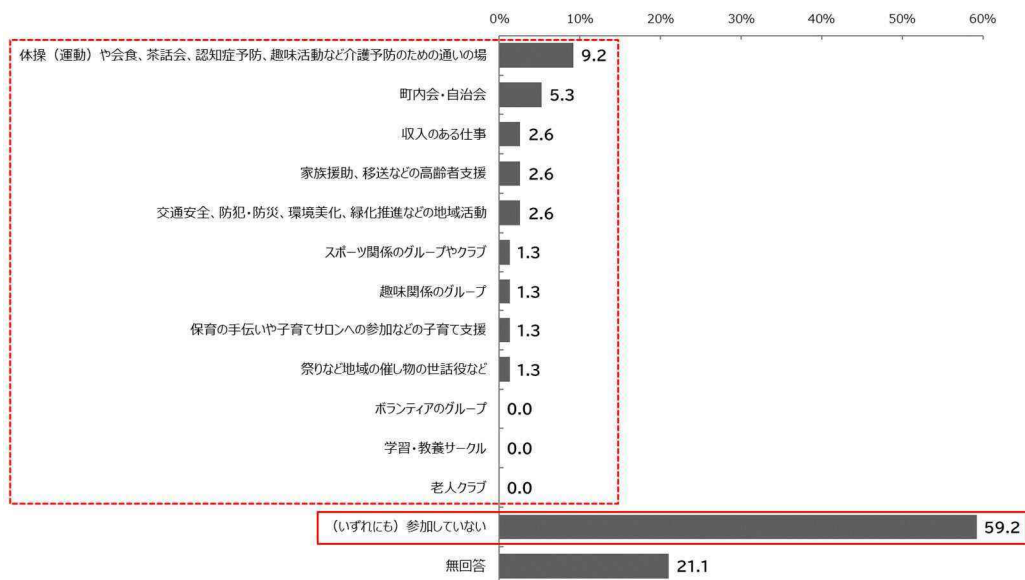
資料：総務省「就業構造基本調査」(令和4年(2022年))

◆半数以上の高齢者が何らかの活動に参加している

仕事や趣味、ボランティアなどの活動状況については、51.3%の方が何らかの活動をしている一方で、いずれの活動にも「参加していない」は36.5%となっています。



さらに、認知症高齢者では、いずれの活動にも「参加していない」のが59.2%に増加し、それぞれの活動への参加も減少しています。



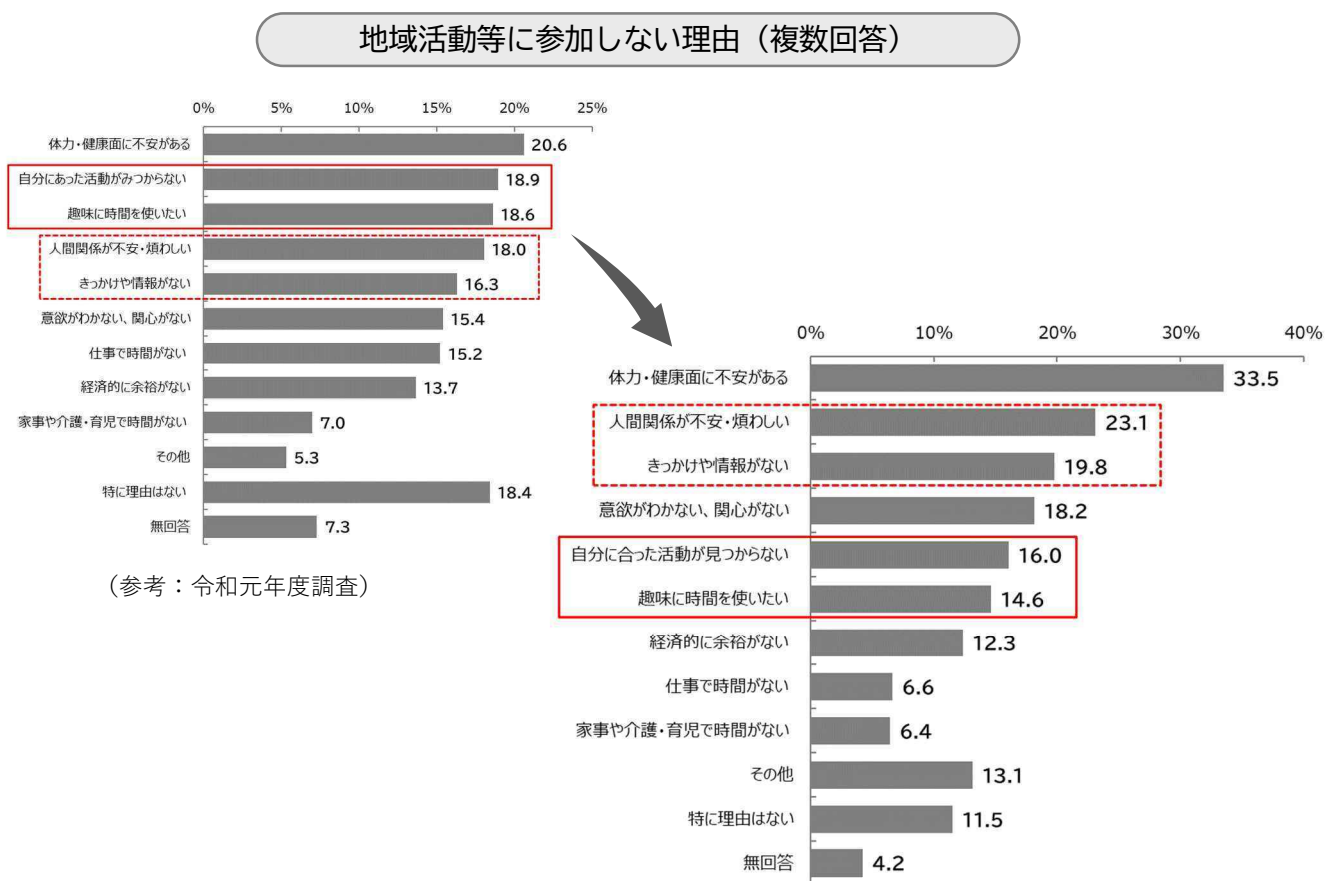
※ 対象は、「認知症（アルツハイマー病など）」を現在治療中、または後遺症のある高齢者

資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆体力・健康面の不安を理由に地域活動等に参加しない高齢者が増加
 地域活動やボランティア活動に参加していない理由については、「体力・健康面に不安がある」が33.5%と最も多く、次いで「人間関係が不安・煩わしい」が23.1%、「きっかけや情報がない」19.8%となっている一方で、「特に理由はない」は11.5%となっています。

また、前回時と比べると、「体力・健康面に不安がある」と回答した方が大幅に増えているほか、活動の意思はあっても活動内容が合わなかったり趣味の活動を優先したりする方が多かった傾向から、人間関係の問題やきっかけなどの不足により参加に踏み出せない方が増えている傾向が見られます。

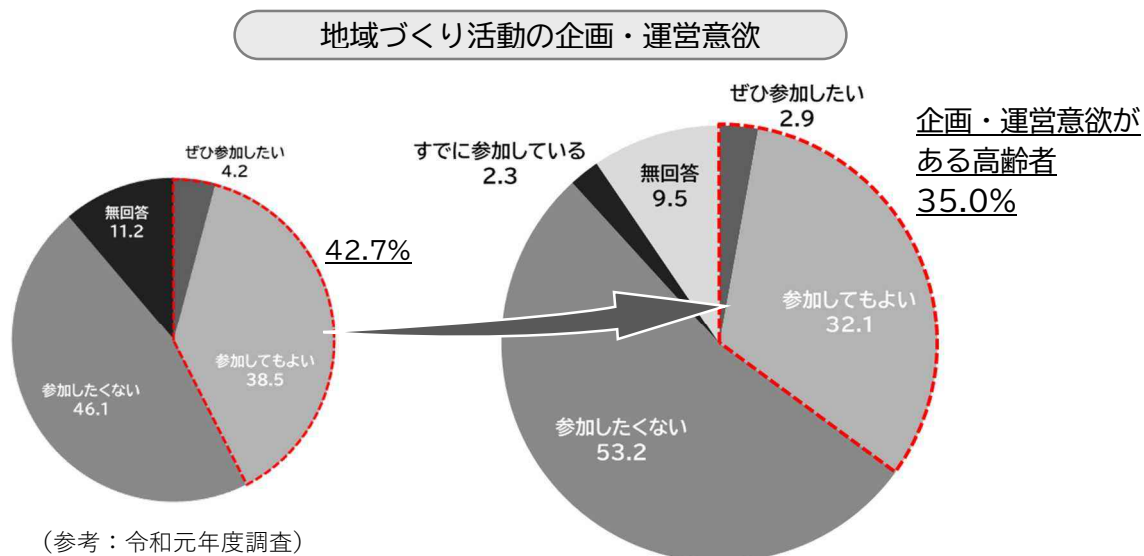


資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
 （令和4年度（2022年度））

◆地域づくり活動の企画・運営意欲が減少

地域づくり活動の企画・運営に「参加したい」「参加してもよい」と答えた方の割合は35.0%と、前回調査時に比べて7.7ポイント減少しています。

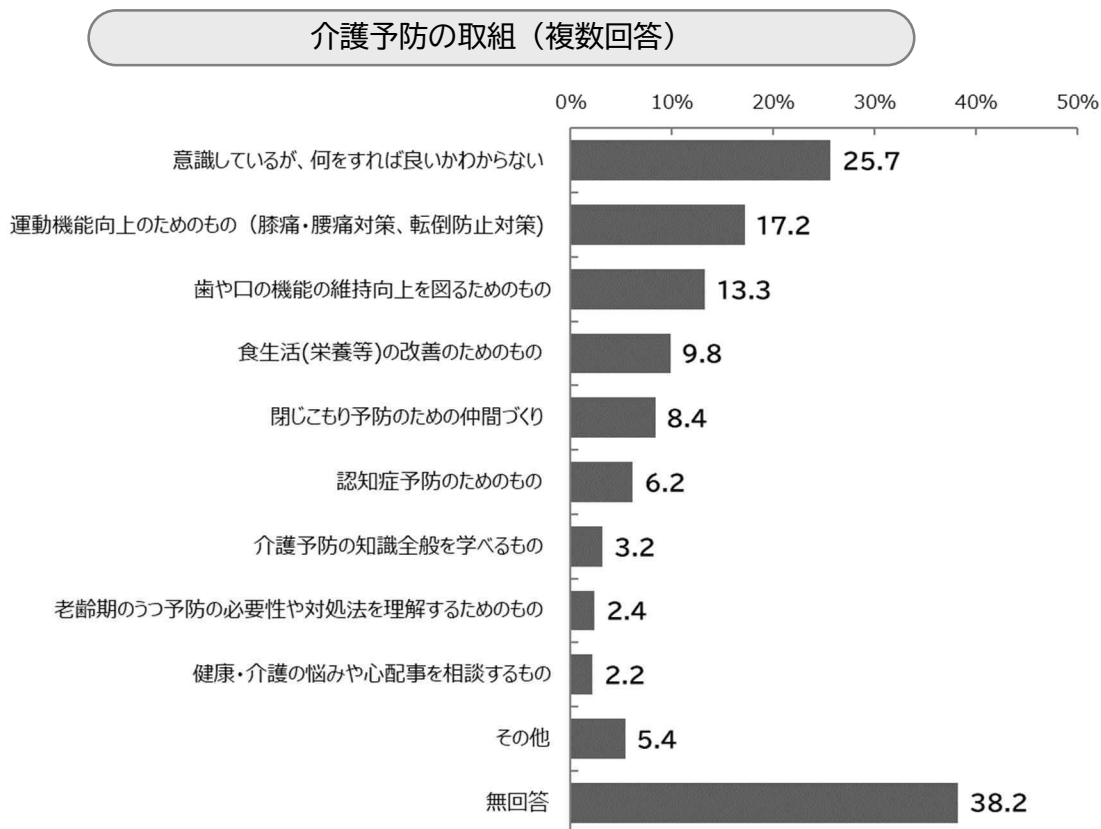
一方、「参加したくない」の割合は53.2%と増加傾向にあり、コロナ禍の影響もあるものと推察されます。



資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
 （令和4年度（2022年度））

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆高齢者の4分の1は介護予防のために何をすれば良いかわからない
介護予防の取組については、「意識しているが、何をすれば良いかわからない」が25.7%と、意識はしていても具体的な介護予防活動につながっていない状況が少なからずあることがわかります。

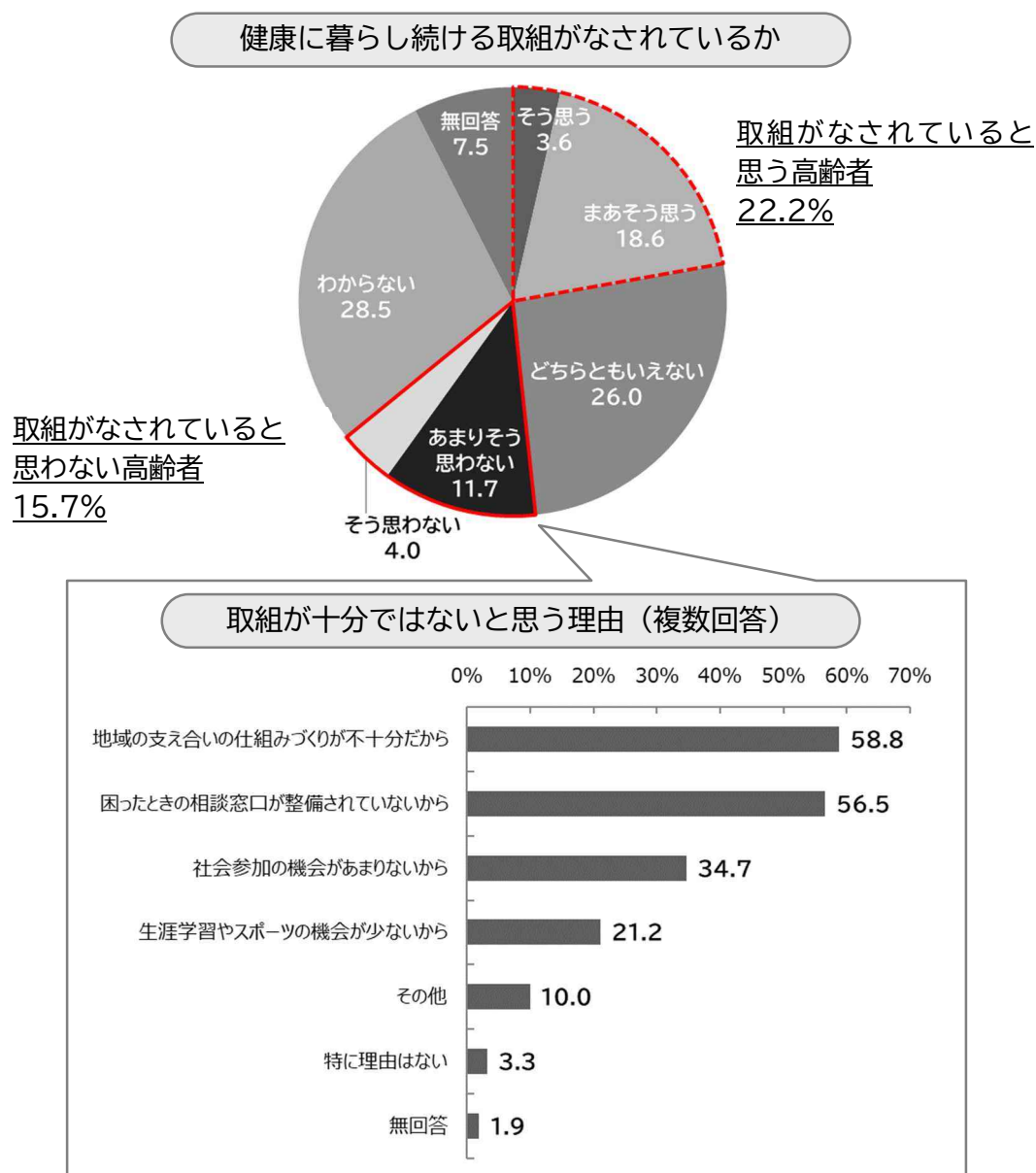


資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

◆健康に暮らし続けるためには地域の支え合いなどが重要

札幌市で健康に暮らし続ける取組がなされているかについては、「そう思う」、「まあそう思う」の合計が22.2%となっています。

また、「あまりそう思わない」、「そう思わない」とする理由としては、「地域の支え合いの仕組みづくりが不十分だから」が58.8%と最も多く、「困ったときの相談窓口が整備されていないから」が56.5%、「社会参加の機会があまりないから」が34.7%となっており、健康に暮らし続けるためには、地域の支え合いと相談窓口の充実が必要だと考えている高齢者が多いことがわかります。

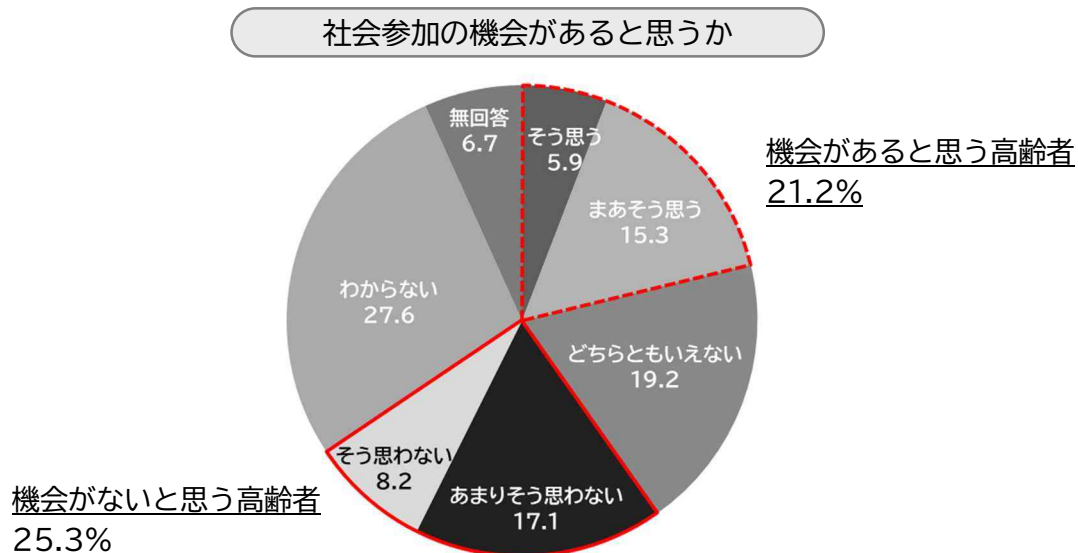


資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆高齢者の4分の1は社会参加の機会が十分ではないと思っている

普段の生活やさまざまな活動の中で、高齢者が積極的に社会参加できる機会があるかについて、「そう思う」「まあそう思う」を合すると21.2%、「あまり思わない」「そう思わない」を合すると25.3%で、機会がないと思う割合のほうが高くなっています。



資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

2 今後の課題について

- 近年の健康意識の高まりなどから、高齢者ができるだけ自立した生活を送れるよう重度化防止に努めていくとともに、要介護状態となることを予防する介護予防の取組のさらなる推進を図り、健康寿命の延伸に努めていく必要があります。

- 特に、この数年間は、コロナ禍で通いの場の休止や活動自粛が生じ、高齢者は自宅に閉じこもることを余儀なくされ、フレイル⁵状態の高齢者の増加が懸念されます。

今後は、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえながら、身体機能の向上のみならず、認知機能や口腔機能の向上といった、より積極的に多角的な介護予防活動を展開していく必要があります。

- また、コロナ禍を経験し、社会参加の機会が十分でないと捉えている高齢者や実際に地域活動に参加していない高齢者が相当数存在していると考えられますが、地域社会や人とのつながりは、心身の活性化やいきがいを持つことにつながり、健康寿命延伸に有効と考えられることから、社会参加の拡大や促進の取組を進めていく必要があります。

介護予防や担い手確保の観点からも、今後も引き続き高齢者のニーズに即した社会参加の機会を拡充していくことが重要です。

⁵ 健康な状態と介護が必要な状態の中間の状態

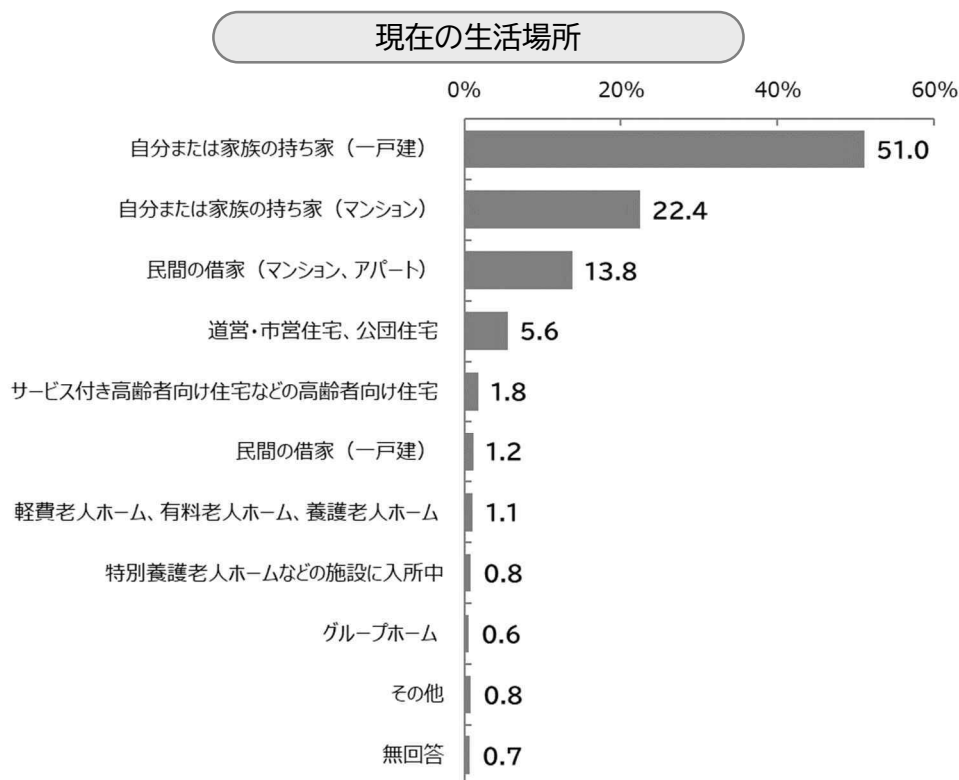
第3節 高齢者の生活と支援体制

1 現状について

(1) 生活環境について

◆高齢者の現在の生活場所は自分や家族の持ち家が7割超

現在の生活場所は、自分(家族)の持ち家の一戸建てが最も多く51.0%、次いで自分(家族)の持ち家のマンションが22.4%となっています。



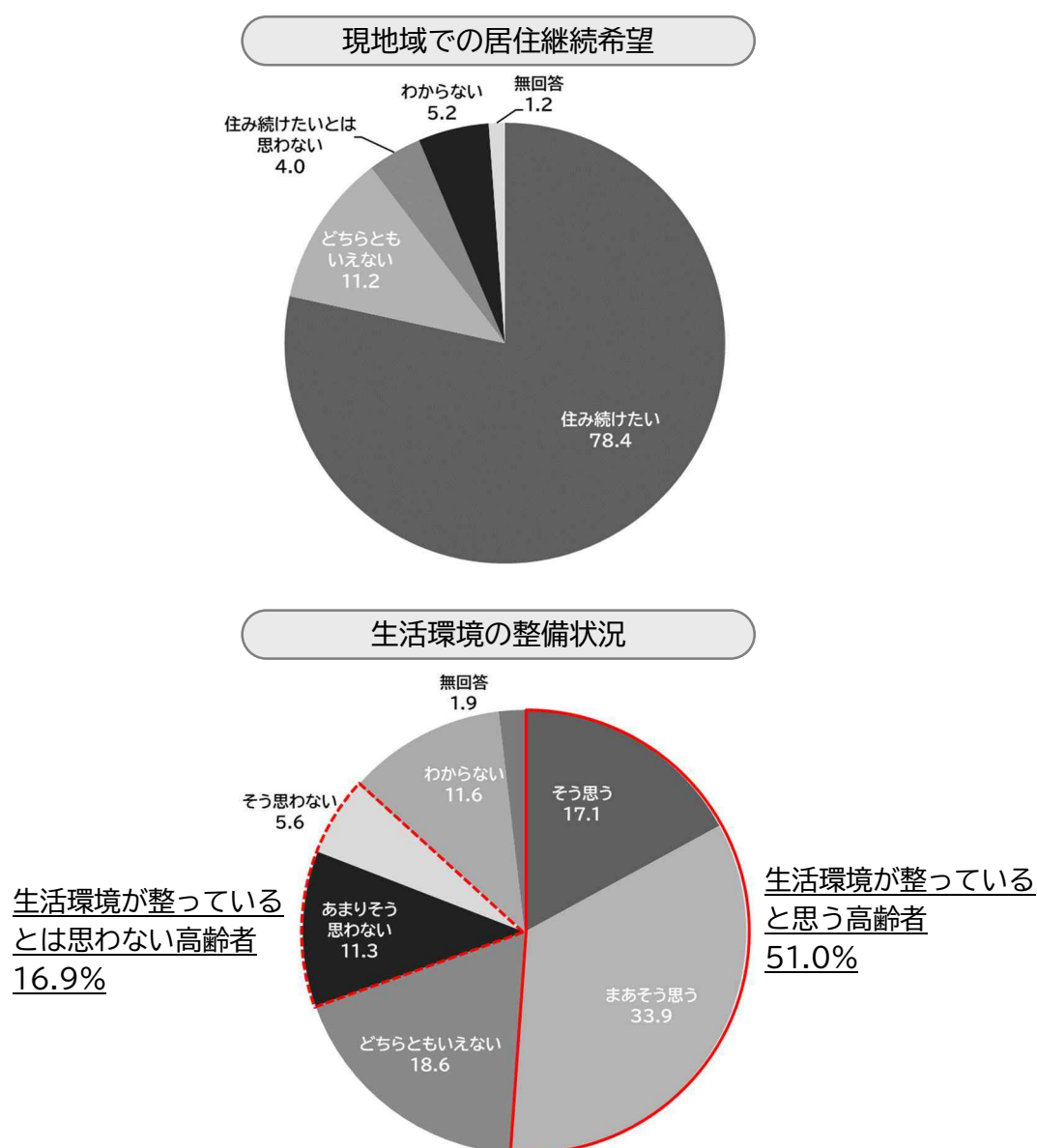
資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

◆高齢者の約8割は現住地域での居住継続を希望している

今後も現在の居住地域に住み続けたいと思うかについては、「住み続けたい」が78.4%と最も多くなっています。

一方で、札幌市は高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けるための生活環境が整っているかについては、「そう思う」「まあそう思う」の合計が51.0%と、札幌市における生活環境の整備状況について肯定的に捉えている高齢者は約半数に留まっていることがわかります。

また、「あまりそう思わない」「思わない」の合計も16.9%となっていることから、引き続き生活環境の整備を進めていくことが重要です。

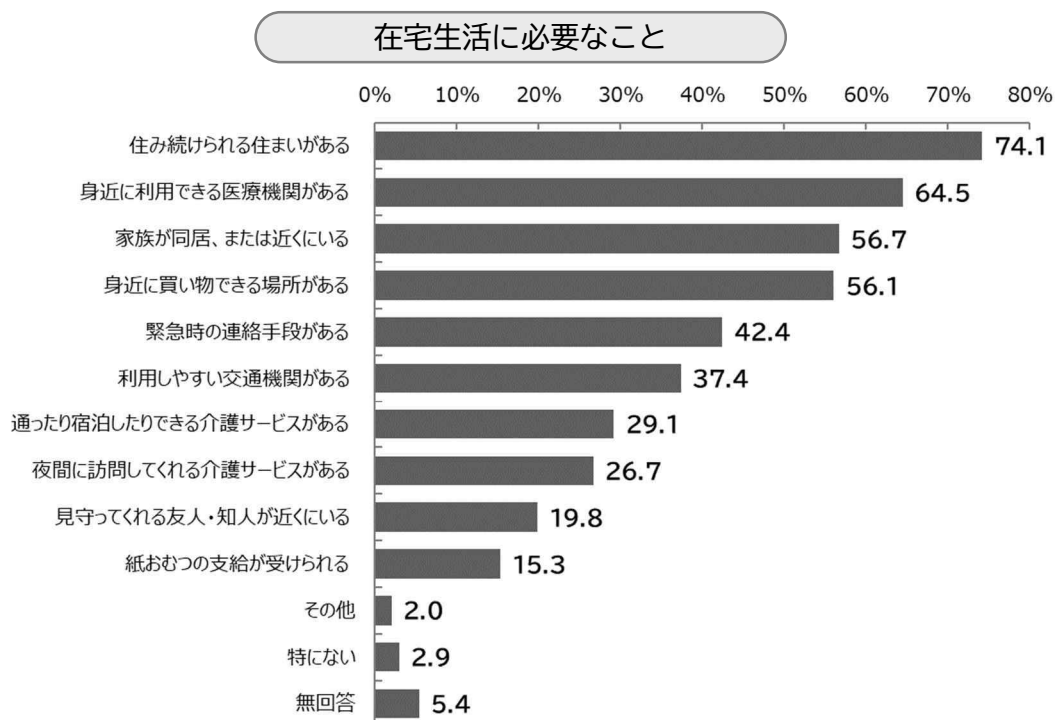


資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆在宅生活を継続するために必要なものは「住み続けられる住まい」

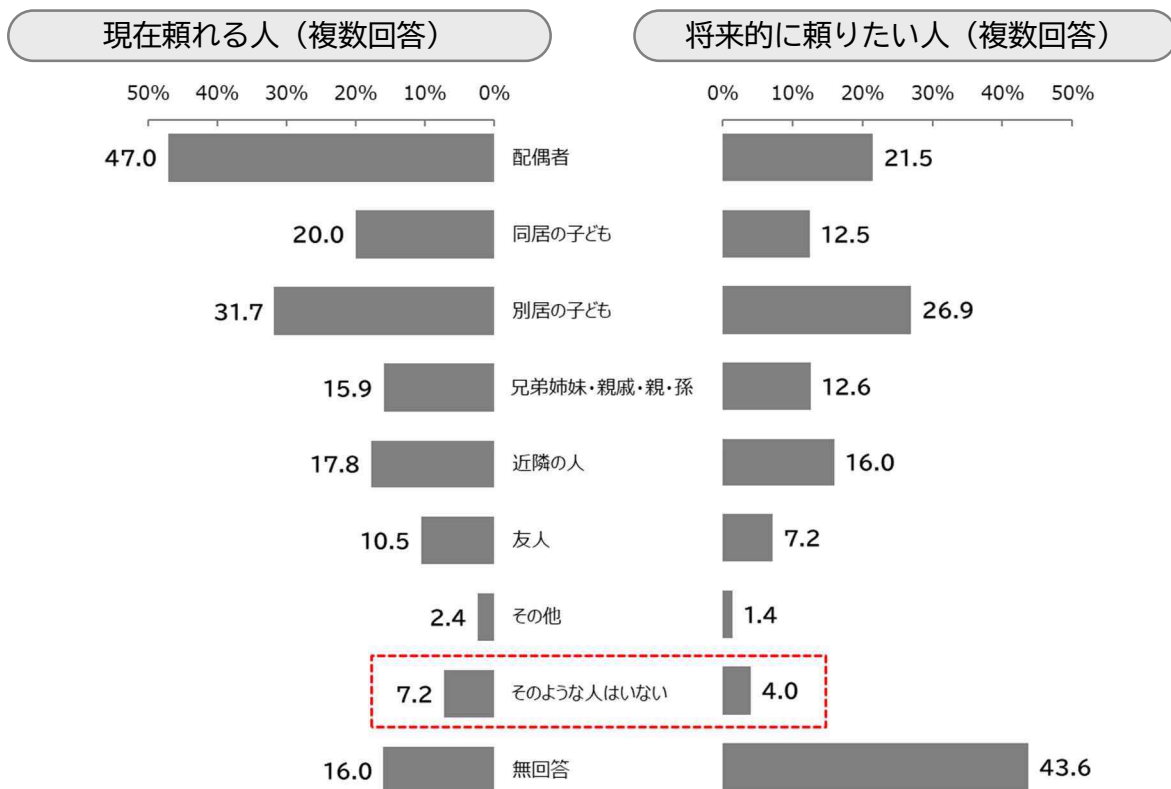
介護が必要になっても、在宅で暮らし続けるために必要なことについては、「住み続けられる住まいがある」が最も多く74.1%となっています。次いで、「身近に利用できる医療機関がある」が64.5%、「家族が同居、または近くにいる」が56.7%、「身近に買い物できる場所がある」が56.1%となっています。



資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

◆有事の際に頼れる人がいない高齢者が1割弱

大雨洪水警報が発令された時などに避難が必要な場合に、現在頼れる人や、将来的に頼りたい人については、いずれも「配偶者」や「別居の子ども」が多くを占めながらも、その一方で、「そのような人はいない」が現在で7.2%、将来で4.0%となっています。



資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

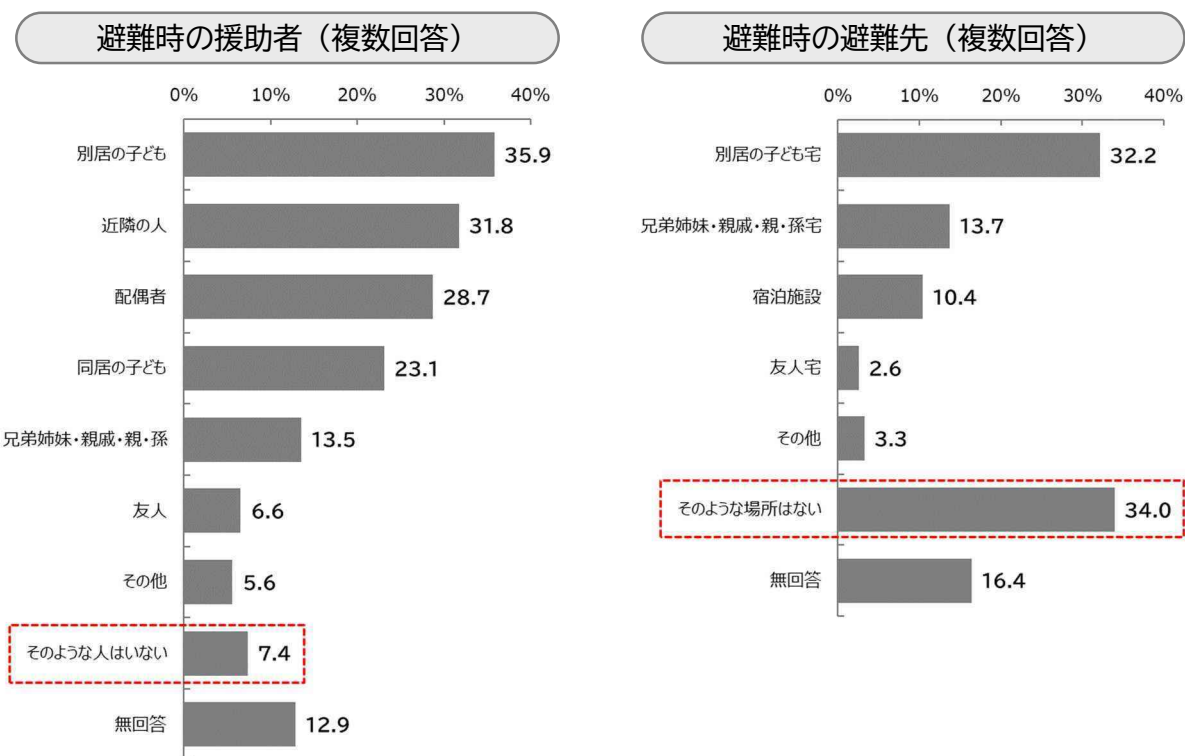
◆要介護等認定者の約3割は避難所以外に避難する場所がない

要介護等認定者に、大雨や洪水警報により避難が必要となった場合に、助けを求める人については、「別居の子ども」が35.9%と最も多く、次いで「近隣の人」が31.8%となっています。

多くの方には避難時に助けを求める相手がいる様子が見られますが、一方で「そのような人はいない」も一定程度いることがわかります。

また、避難する場合に指定避難所⁶及び要配慮者二次避難所（福祉避難所）⁷以外に避難する場所については、「別居の子ども宅」が32.2%と最も多くなっていますが、全体として最も多いのは「そのような場所はない」が34.0%となっています。

高齢者や要介護等認定者が、いざ有事の際に頼る相手や場所がないという状況に陥らないよう、平時からの備えとして個別避難計画⁸を策定するなどの取組を進めていく必要があります。



資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

⁶ 災害から身を守るため緊急的に避難する施設など

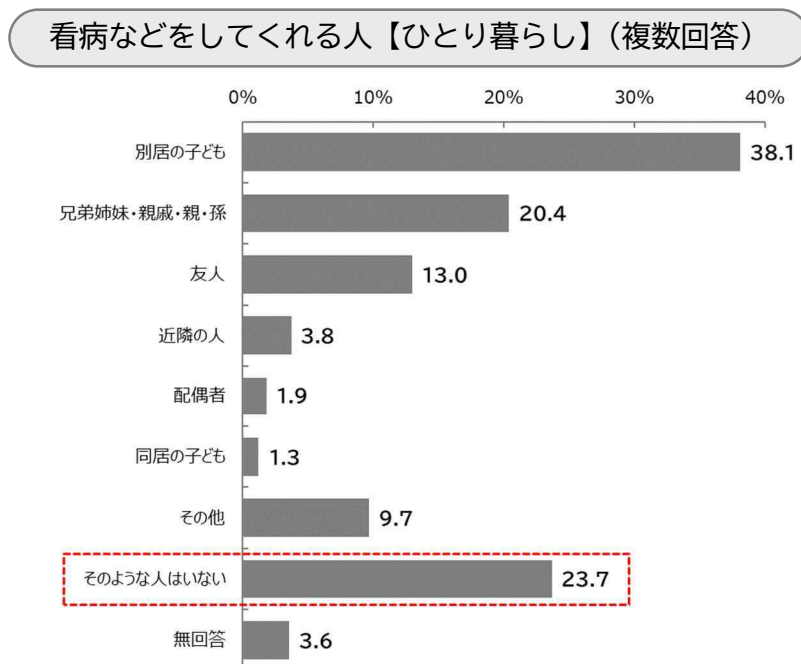
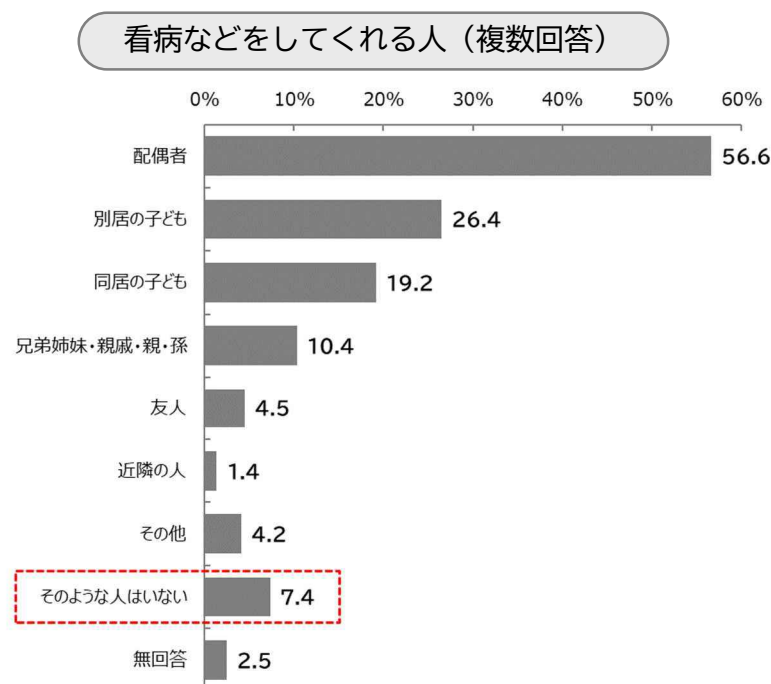
⁷ 指定避難所の福祉避難サービスでの避難生活が困難な要配慮者のために、日常生活上の生活支援体制が整った避難所として、施設との調整をした後に開設するもの

⁸ 大雨や土砂災害など、頻発する自然災害に対し、自ら避難することが難しい高齢、障がい、難病、妊産婦等について、「いつ」、「どこへ」、「誰と一緒に」、「どのように逃げるのか」、「避難にあたって配慮してほしいこと」などについて、あらかじめご本人と相談のもとに決めておく計画

(2) 生活をするうえでの困りごとや不安

◆ひとり暮らし高齢者の約2割は体調を崩しても頼る相手がいない

病気で数日間寝込んだときに看病や世話をしてくれる人について、ひとり暮らしの高齢者では「別居の子ども」が最も多くなっていますが、次いで多いのが「そのような人はいない」であり、高齢者全体と比較すると頼る人がいない割合が大きいことがわかります。

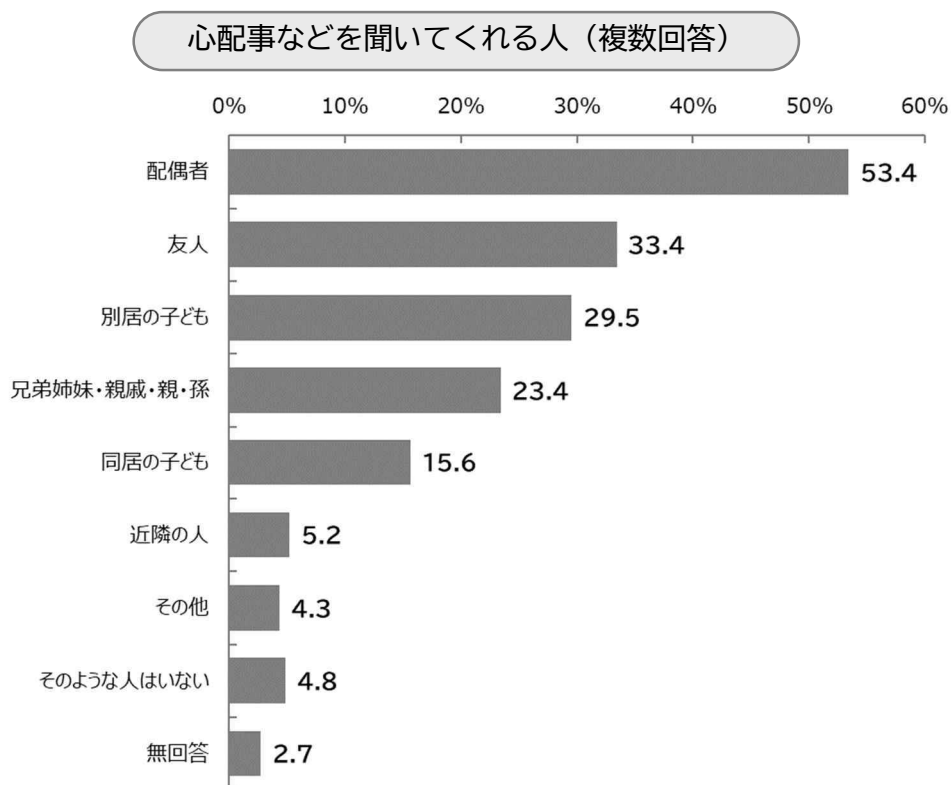


資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆ 9割以上の高齢者に心配事などを聞いてくれる人がいる

心配事や愚痴を聞いてくれる人については、「配偶者」が53.4%と最も多く、次いで「友人」が33.4%、「別居の子ども」が29.5%となっている一方で、4.8%が「そのような人はいない」と回答しており、話を聞いてくれる相手がいらない方が一定程度いることがわかります。



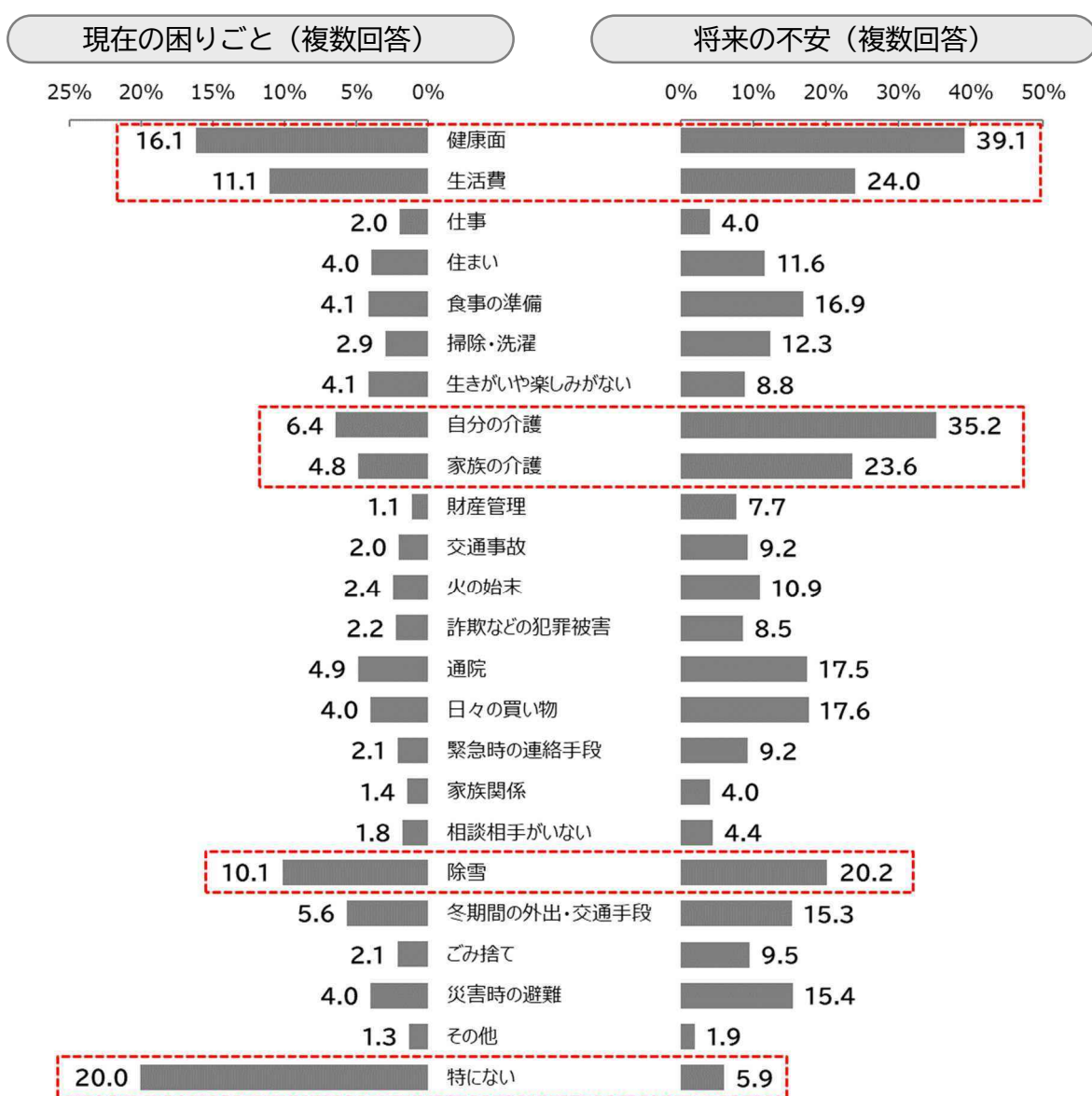
資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

◆自分の健康や介護に不安を持つ高齢者が多い

現在困っていることや、将来に向けて不安に思うことについては、現在は「特にない」としながらも、全体的に将来には不安を覚えている傾向が見られます。

困りごとや不安の要素としては、ともに「健康面」が最も多く、「生活費」や「自分の介護」、「除雪」が上位に挙げられています。さらに、これらはいずれも将来に向けてその割合が増加しています。

また、将来不安に思うこととして「家族の介護」と答えた方も2割を超えています。



※「無回答」(47.9%)を除いて表示

※「無回答」(36.1%)を除いて表示

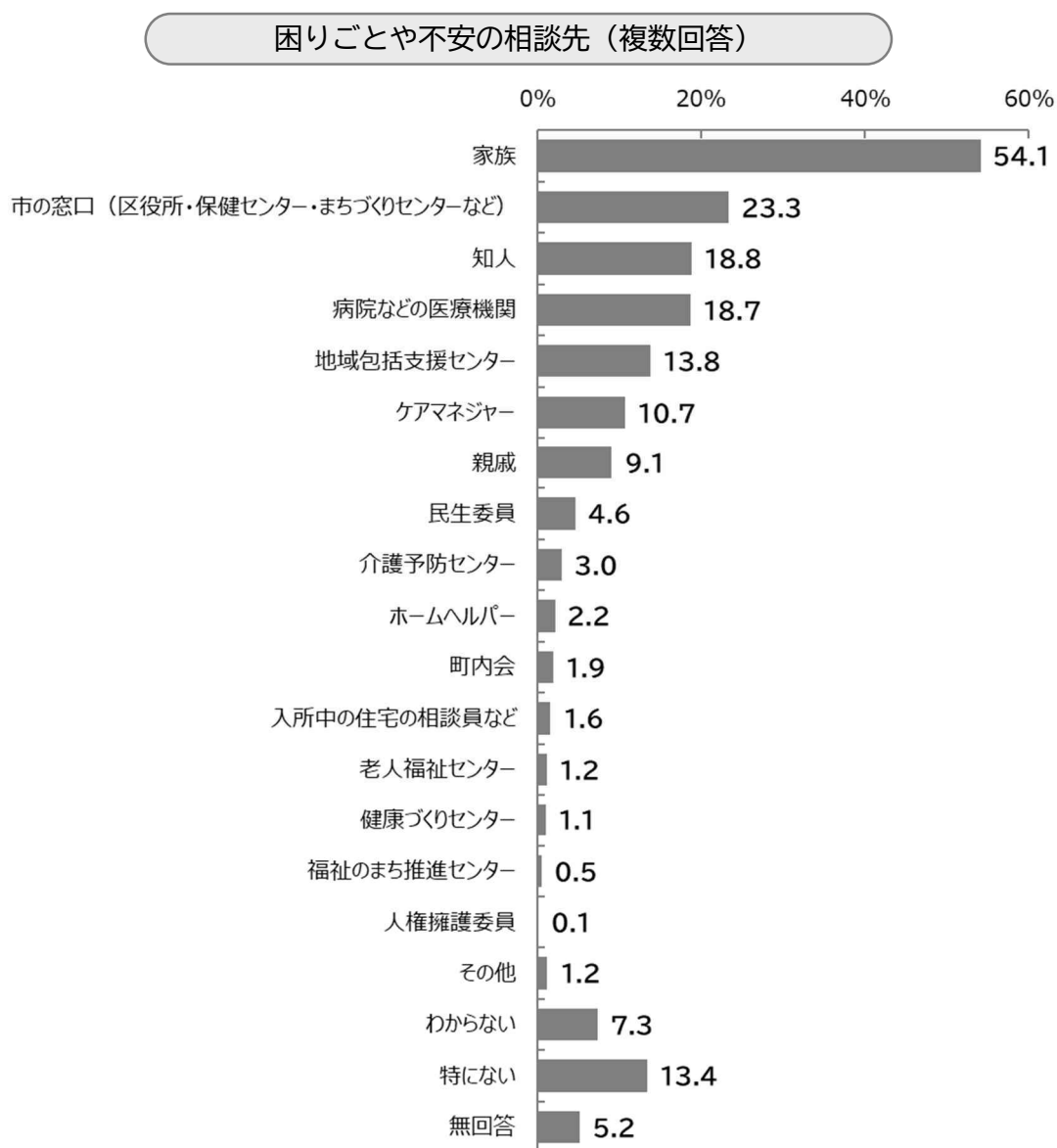
資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査(65歳以上)」
(令和4年度(2022年度))

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆困りごとなどの相談先に家族を挙げる高齢者が半数以上

困っていることや不安に思うことの相談先については、「家族」が54.1%と最も多く、次いで「市の窓口（区役所・保健センター・まちづくりセンターなど）」が23.3%となっています。

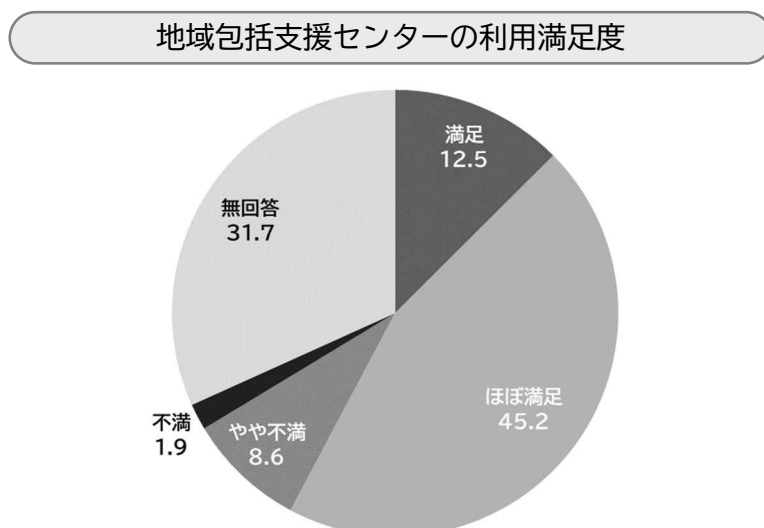
一方、「わからない」が7.3%、「特にない」が13.4%と、前回調査（それぞれ7.0%、13.6%）からほぼ横ばいとなっています。



資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

◆高齢者の約6割が地域包括支援センターの利用に満足している

高齢者の総合相談窓口である地域包括支援センターの利用満足度については、「満足」「ほぼ満足」の合計が57.7%となっている一方で、「やや不満」「不満」の合計は10.5%となっています。



※地域包括利用センターを「利用していない」と回答した方を除いて表示

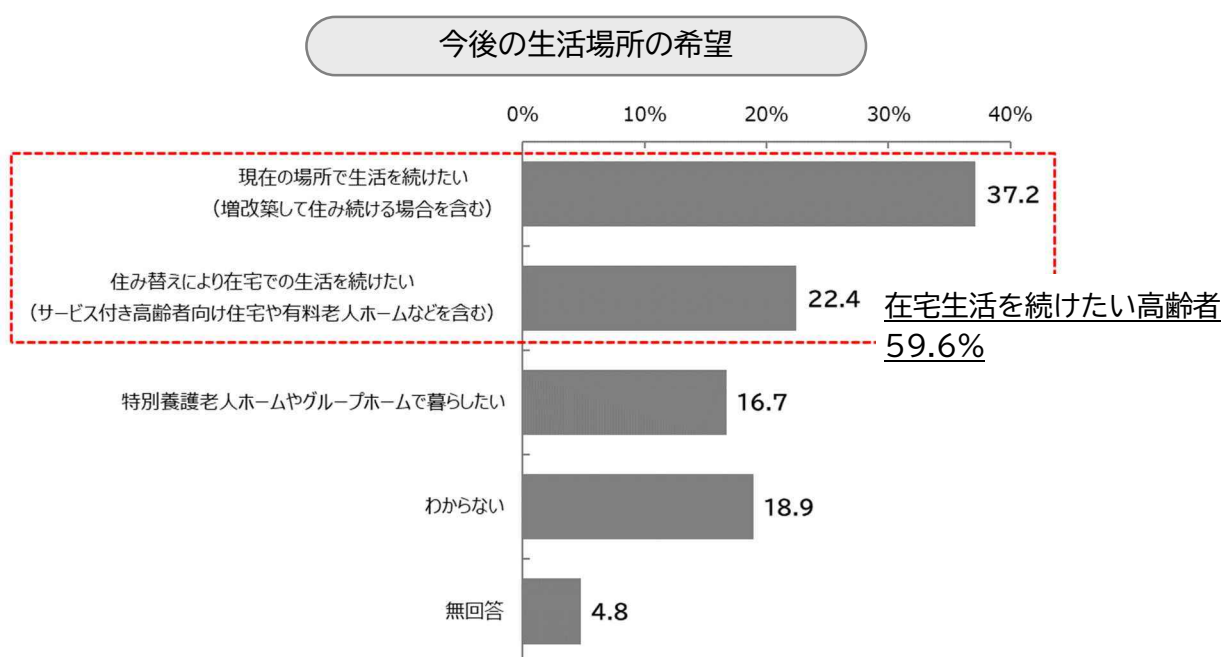
資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

(3) 人生の終末に関する意識

◆できるだけ在宅生活を続けたい

身体が弱くなったなど場合の生活場所については、高齢者の約6割が、「現在の場所で生活を続けたい」または「住み替えにより在宅での生活を続けたい」と回答しており、在宅生活の継続を希望する高齢者が多いことがわかります。

一方で、「特別養護老人ホームやグループホームで暮らしたい」と回答する高齢者も16.7%おり、施設でのケアを望む方も一定数います。

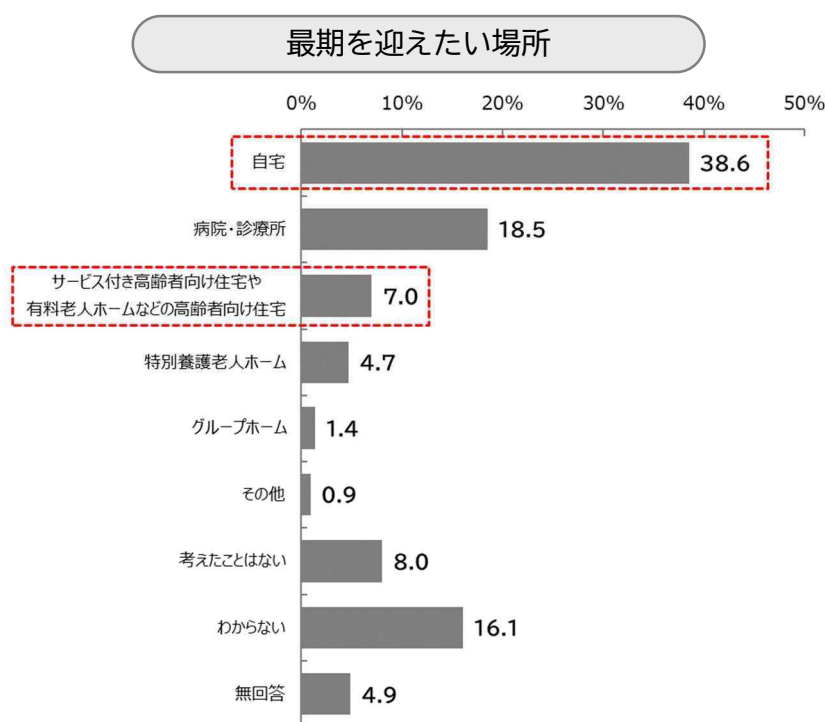


資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

◆最期は「自宅」で迎えたい

最期を迎えたい場所については、「自宅」が38.6%と最も多く、「サービス付き高齢者向け住宅や有料老人ホームなどの高齢者向け住宅」は7.0%に留まっています。

今後の生活場所としては、高齢者向け住宅も含めた在宅生活を希望する方もいますが、最期を迎える場所には自宅を望む高齢者が多い傾向が見られます。



資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

人生会議（ACP：アドバンス・ケア・プランニング）



誰でも、いつでも、命に関わる大きな病気やケガをする可能性があります。命の危機が迫った状態になると、約70%の方が医療やケアなどを自分で決めたり、望みを人に伝えたりすることができなくなるといわれています。自ら希望する医療やケアを受けるために、大切にしていることや望んでいること、どこでどのような医療やケアを望むかを自分自身で前もって考え、周囲の信頼する人たちと話し合い共有することが重要です。もしもの時のために自分自身が望む医療やケアについて前もって考え、繰り返し話し合い、共有することを国は「人生会議（ACP：アドバンス・ケア・プランニング）」と呼び、この取組の浸透を進めています。

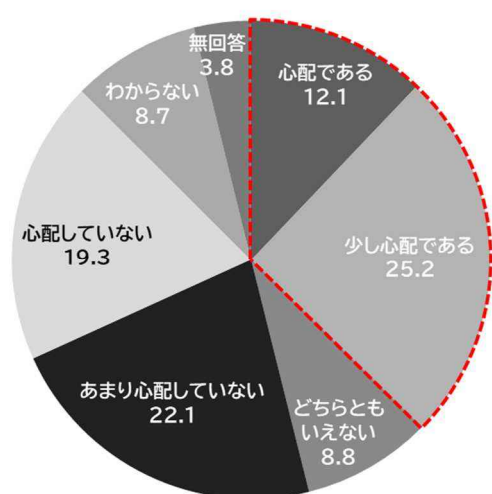
（詳しくは国のHPをご覧ください → https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_02783.html）

◆約4割が孤立死を心配、ひとり暮らしではさらに増加

孤立死の心配については、「心配である」「少し心配である」の合計が37.3%と、高齢者の約4割が孤立死に対して心配を抱えています。

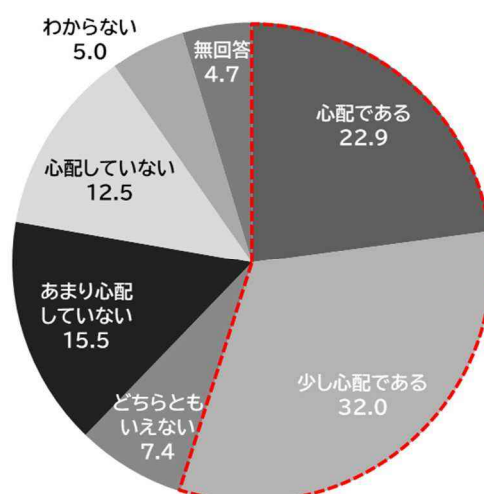
さらに、ひとり暮らしの場合ではその割合が54.9%とさらに高くなっており、ひとり暮らし高齢者では孤立死に対する心配がより顕著に表れることがわかります。

孤立死の心配



孤立死を心配する高齢者
37.3%

孤立死の心配【ひとり暮らし】



孤立死を心配するひとり暮らし高齢者
54.9%

資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

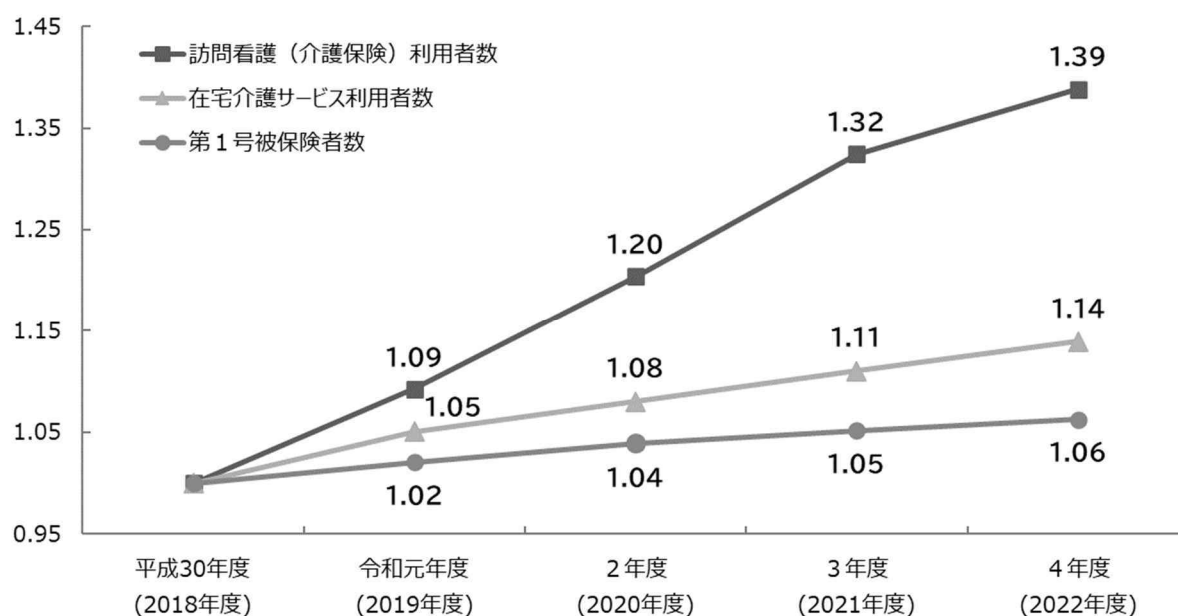
(4) 在宅生活を支える医療・介護サービス

◆在宅における医療的ケアのニーズの高まり

介護保険の訪問看護利用者数は、第1号被保険者数や在宅介護サービス⁹利用者数の伸びに比べて年々大きく増加しており、過去5年間で約1.4倍にもなっています。

在宅におけるサービスとして医療的ケアを求める高齢者のニーズが継続的に高まっていることがわかります。

札幌市の第1号被保険者数、在宅介護サービス利用者数と訪問看護利用者数の推移
(平成30年度(2018年度)を1としたときの指数)



資料：札幌市保健福祉局

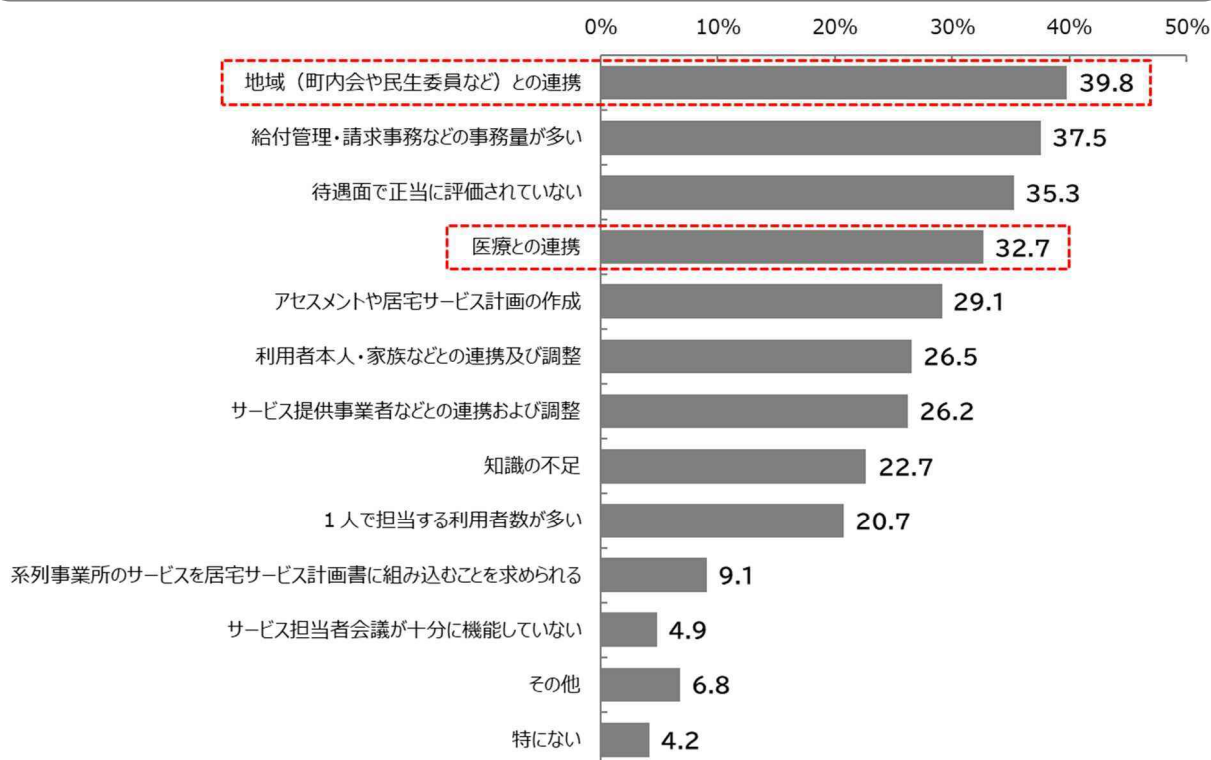
⁹ 介護サービスのうち、施設サービス（介護老人福祉施設（地域密着型を含む）、介護老人保健施設、介護療養型医療施設、介護医療院）と 居住系サービス（特定施設入居者生活介護（地域密着型を含む）、認知症対応型共同生活介護）を除いたサービス

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆介護支援専門員は地域や医療との連携に不安を抱えている

居宅介護支援事業所の介護支援専門員が、業務を進めるうえで困難や不安を感じることは、業務量や待遇面に関する回答も多い一方で、「地域（町内会や民生委員など）との連携」が39.8%、医師や看護師、医療ソーシャルワーカーとの調整といった「医療との連携」が32.7%と、地域や医療関係者との連携に困難や不安を感じている介護支援専門員が多いことがわかります。

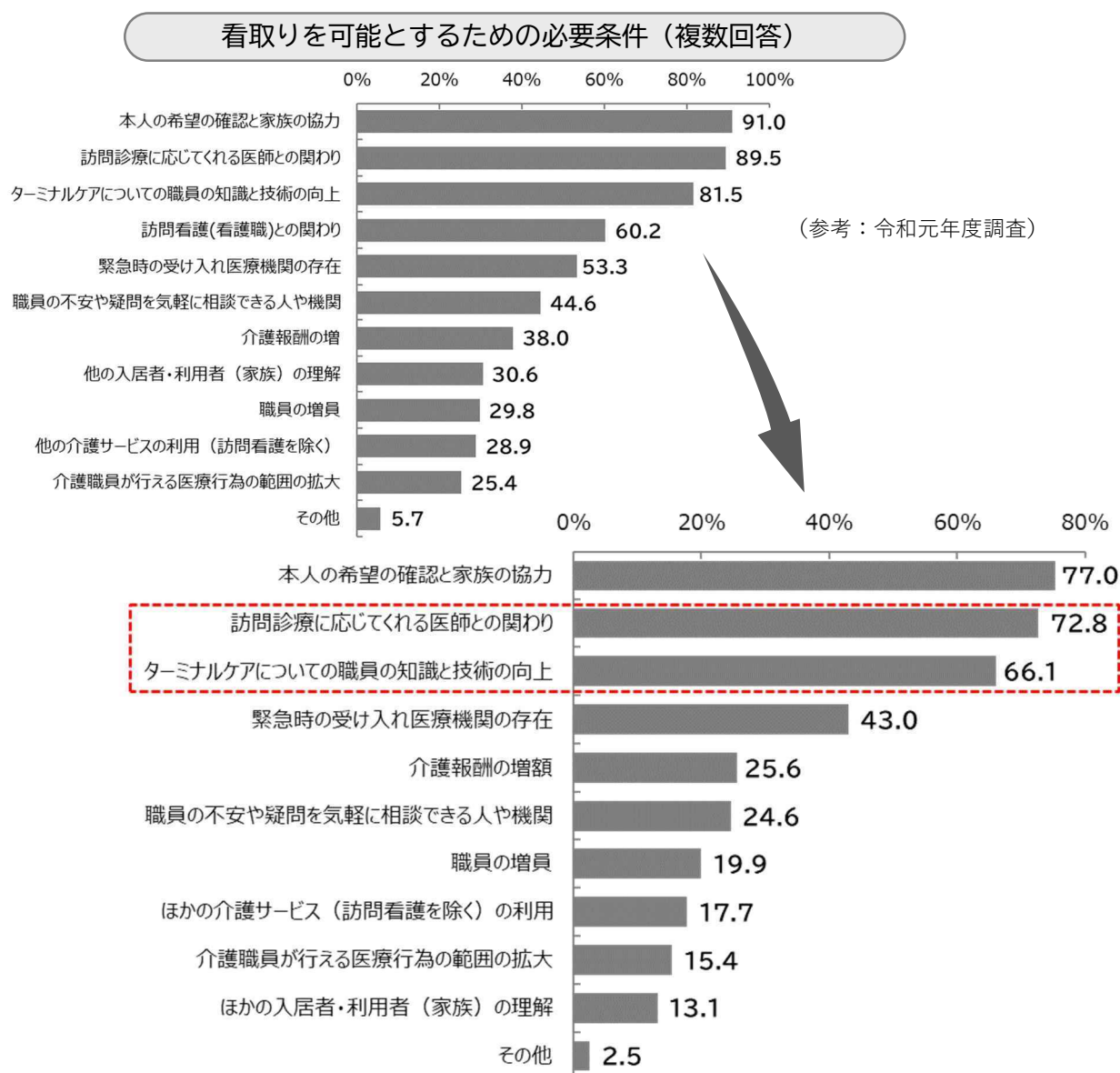
業務を進めるうえで困難、不安を感じていること【居宅介護支援事業者】（複数回答）



資料：札幌市保健福祉局「介護保険サービス提供事業者調査（居宅介護支援事業者）」
（令和4年度（2022年度））

◆在宅で看取りを可能とするために

介護サービス事業所が看取りを行うための必要条件を見ると、前回調査と比べると全体的にハードルが下がってきている様子が伺えますが、「本人の希望の確認と家族の協力」や「訪問診療に応じてくれる医師との関わり」や「ターミナルケアについての職員の知識と技術の向上」が約7割となっており、これらが在宅で看取る場合の重要な要素であることがわかります。



※ 対象は、訪問看護事業者、居宅介護支援事業者、定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業者、認知症対応型共同生活介護事業者、看護小規模多機能型居宅介護事業者、介護老人福祉施設（地域密着型を含む。）、介護老人保健施設、養護老人ホーム、軽費老人ホーム、ケアハウス、有料老人ホーム（特定施設入居者生活介護）

資料：札幌市保健福祉局「介護保険サービス提供事業者調査（訪問看護事業者ほか7事業者）」
（令和4年度（2022年度））

2 今後の課題について

- 心配事や困りごとがあっても話をする相手がいない、相談先がわからないという高齢者が一定数おり、特にひとり暮らし高齢者の中には、体調を崩した場合でも頼れる相手がおらず、孤立死の心配を抱いている方もいます。

近年ではコロナ禍の影響もあり、人と人との関りが希薄になっていますが、身近な地域で緩やかに見守るなど、状況やニーズに即した相談や支援の仕組みを整えていく必要があります。

- この取組は自然災害時などの避難支援にもつながるものであり、公的サービスだけでは手の届かない細やかな支え合いの仕組みを構築することが重要です。

今後は、地域において多様なサービスが提供できるようサービス提供主体の拡充と連携強化に努めていく必要があります。

- 高齢者の多くは、健康状態が悪化しても住み慣れた自宅で暮らし続けることを希望しています。そのためには医療と介護の連携が不可欠であり特に最期まで自分らしく生きることを支える「看取り」の支援においては、医療と介護の一層の連携強化や、介護サービス事業所の職員の知識と技術の向上が求められています。

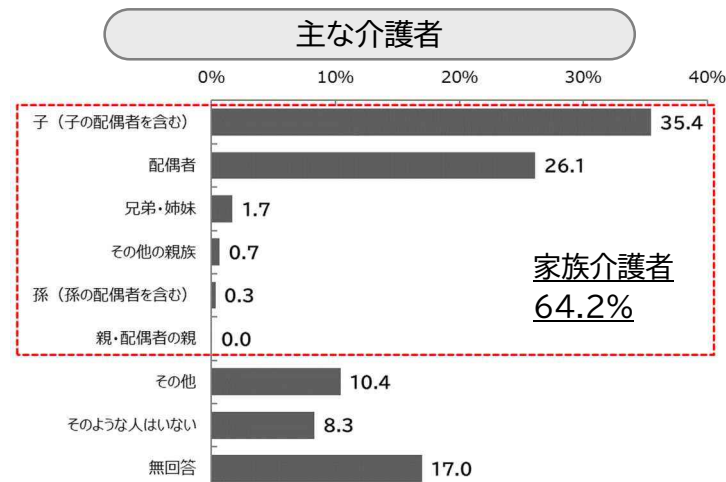
第4節 家族介護者の状況

1 現状について

(1) 介護者の属性

◆主な介護者の約6割が家族介護者

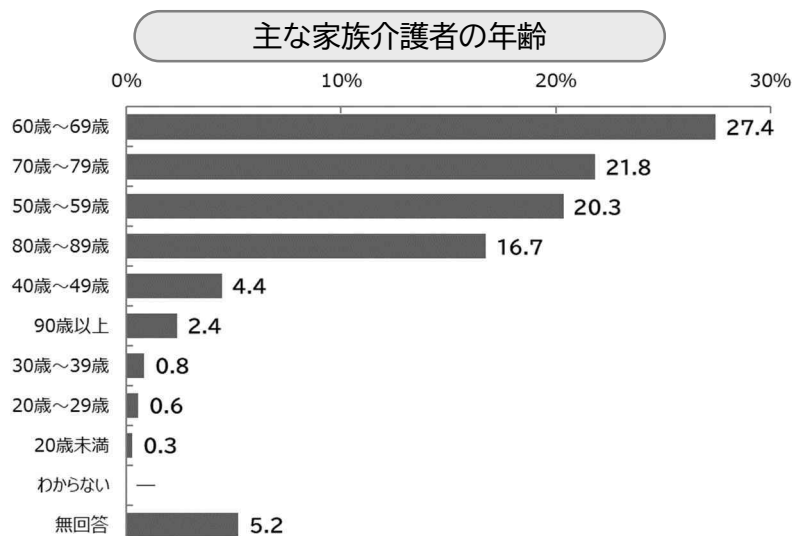
主な介護者の続柄としては「子（子の配偶者を含む）」が35.4%と最も多く、次いで「配偶者」が26.1%となっています。



資料：札幌市保健福祉局「要介護（支援）認定者意向調査」（令和4年度（2022年度））

◆主な家族介護者の年齢層では60代が最多

主な家族介護者の年齢は「60～69歳」が27.4%と最も多く、次いで「70～79歳」が21.8%であり、「80～89歳」も16.7%を占めています。



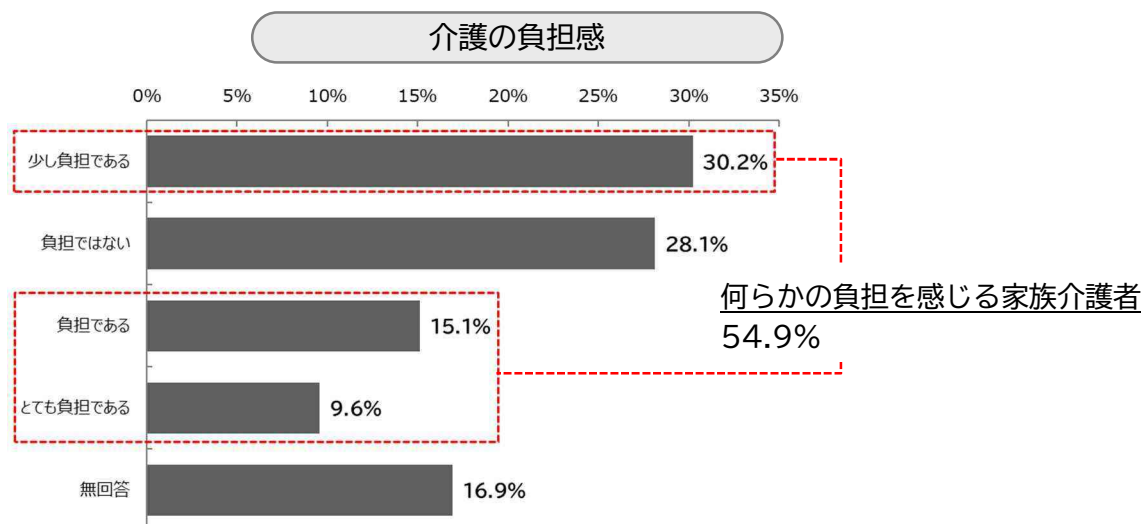
資料：札幌市保健福祉局「要介護（支援）認定者意向調査」（令和4年度（2022年度））

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

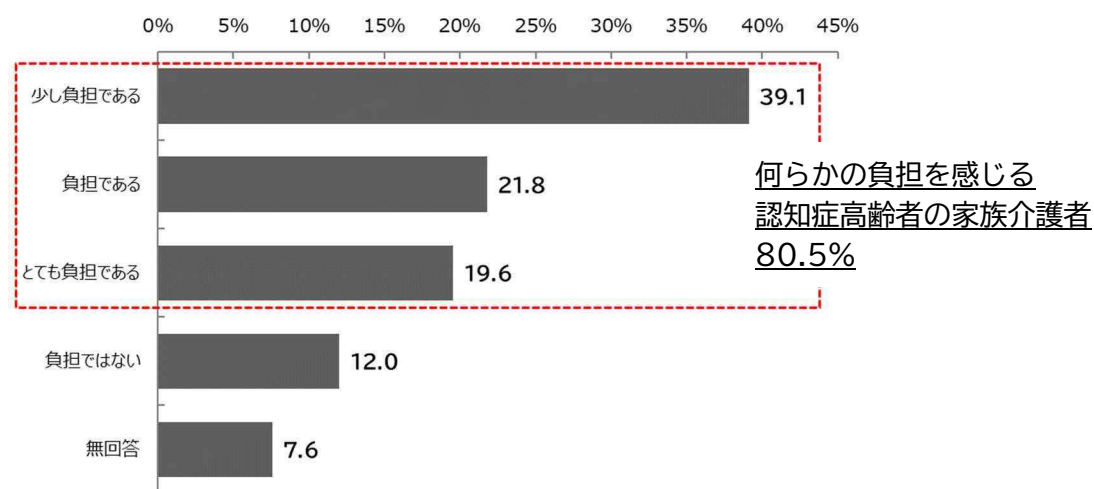
(2) 家族介護者の状況

◆家族介護者の半数以上が介護に負担を感じている

家族介護者の介護の負担感については、「少し負担である」、「負担である」、「とても負担である」の合計が54.9%となっています。



特に、認知症の方の家族介護者では、何らかの負担を感じる方の割合は80.5%と、介護に対する負担感も強いことがわかります。



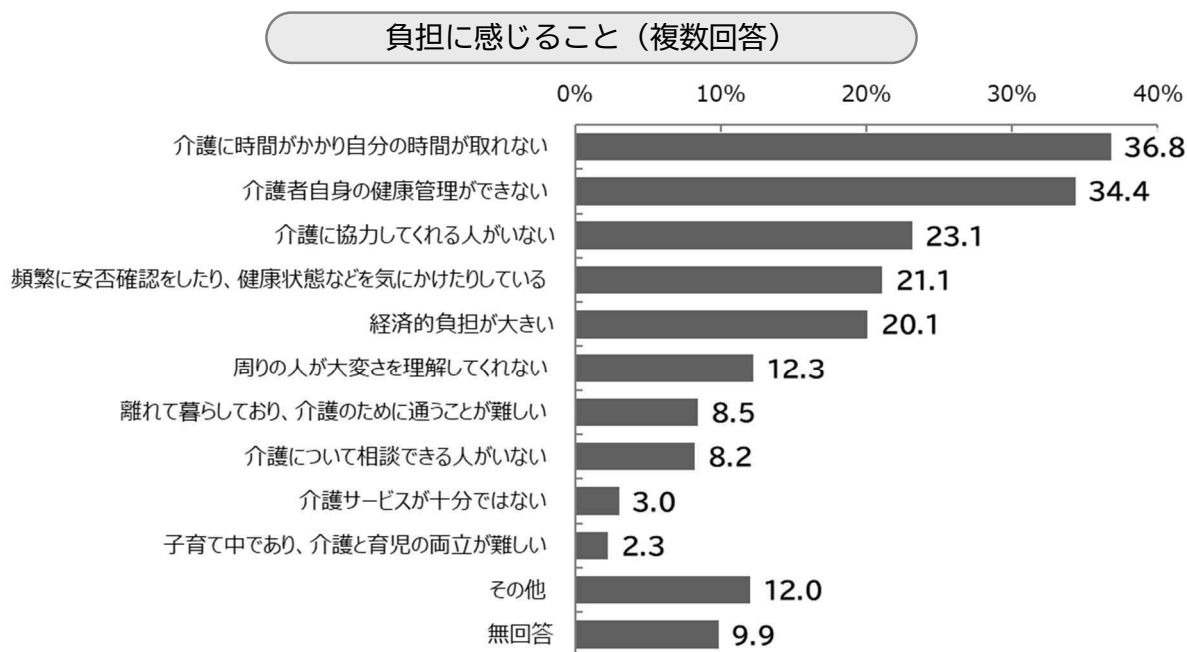
※ 対象は、「認知症（アルツハイマー病など）」を現在治療中、または後遺症のある方の家族介護者

資料：札幌市保健福祉局「要介護（支援）認定者意向調査」
(令和4年度（2022年度）)

◆家族介護者は自分の時間が取れず、健康管理も難しい

家族介護者が負担に感じることについては、「介護に時間がかかり自分の時間が取れない」や「介護者自身の健康管理ができない」がともに3割強となっており、介護者自身に関することの優先順位が低くなる傾向があります。

また、「介護に協力してくれる人がいない」や「周りの人が大変さを理解してくれない」、「介護について相談できる人がいない」といった回答も一定数あり、家族介護者の孤立が懸念されます。



※ 対象は、前ページ上段の何らかの負担を感じる家族介護者

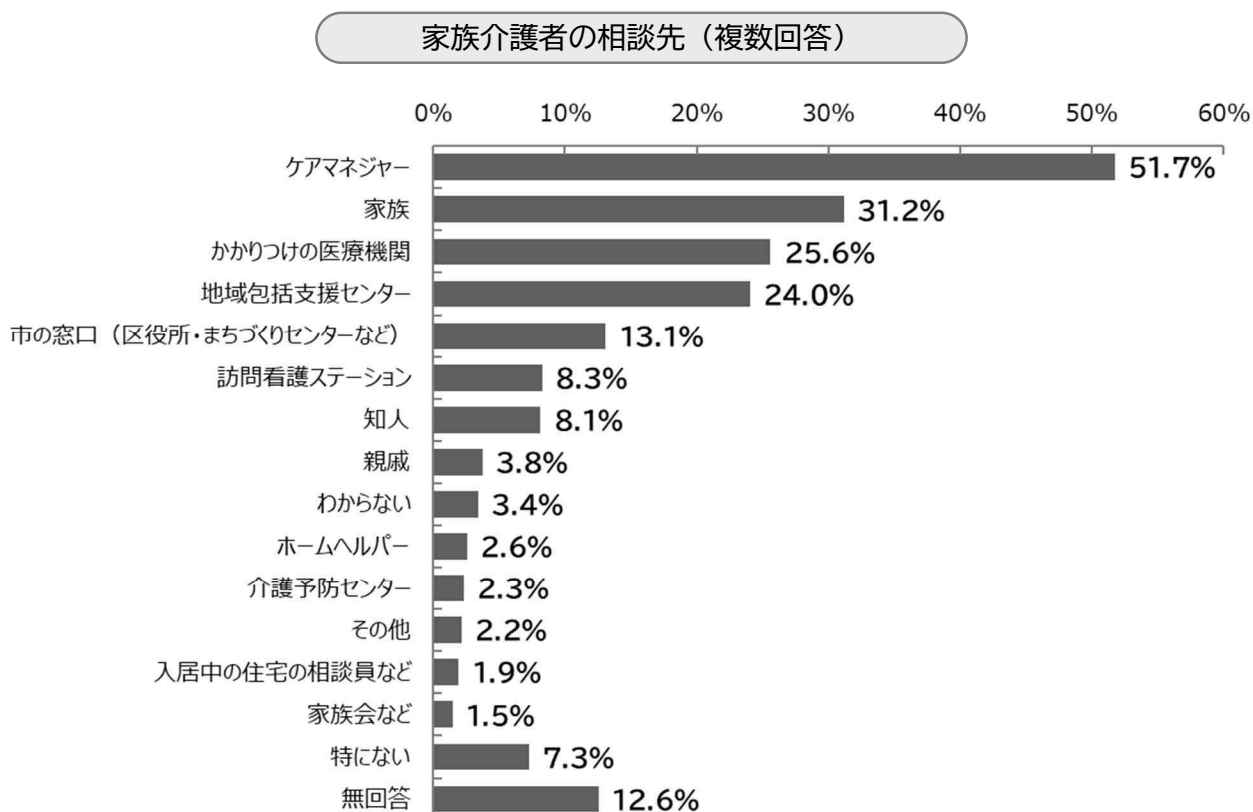
資料：札幌市保健福祉局「要介護（支援）認定者意向調査」（令和4年度（2022年度））

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆介護の相談先として最も選ばれるのはケアマネジャー

介護などについて困っていることや不安に感じることの相談先については、「ケアマネジャー」（介護支援専門員）が51.7%、「かかりつけの医療機関」が25.6%と専門職や医療機関が多くなっています。

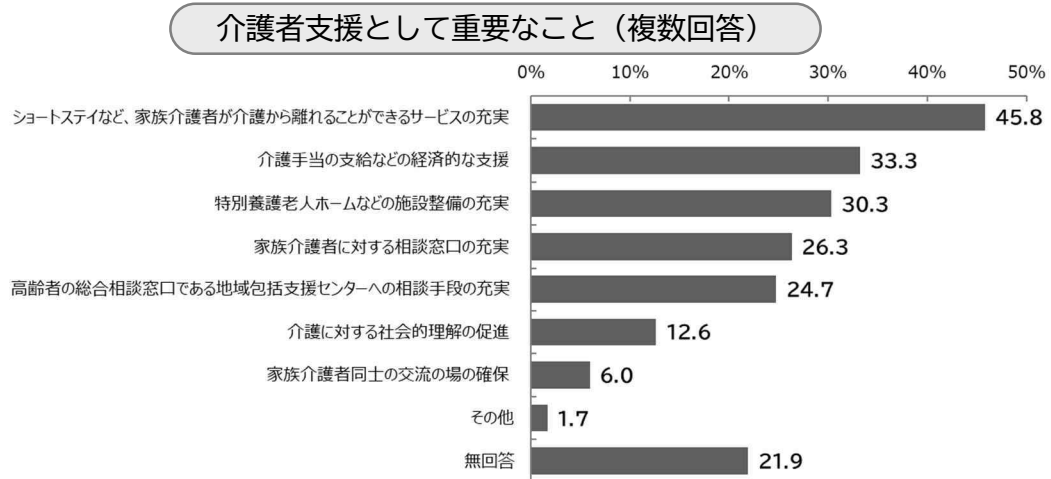
一方で、「家族」も31.2%と比較的多く、介護の問題などを家族内で解決しようという場合も少なからずあることが想定されます。



資料：札幌市保健福祉局「要介護（支援）認定者意向調査」（令和4年度（2022年度））

◆最も求められている介護者支援はレスパイト¹⁰

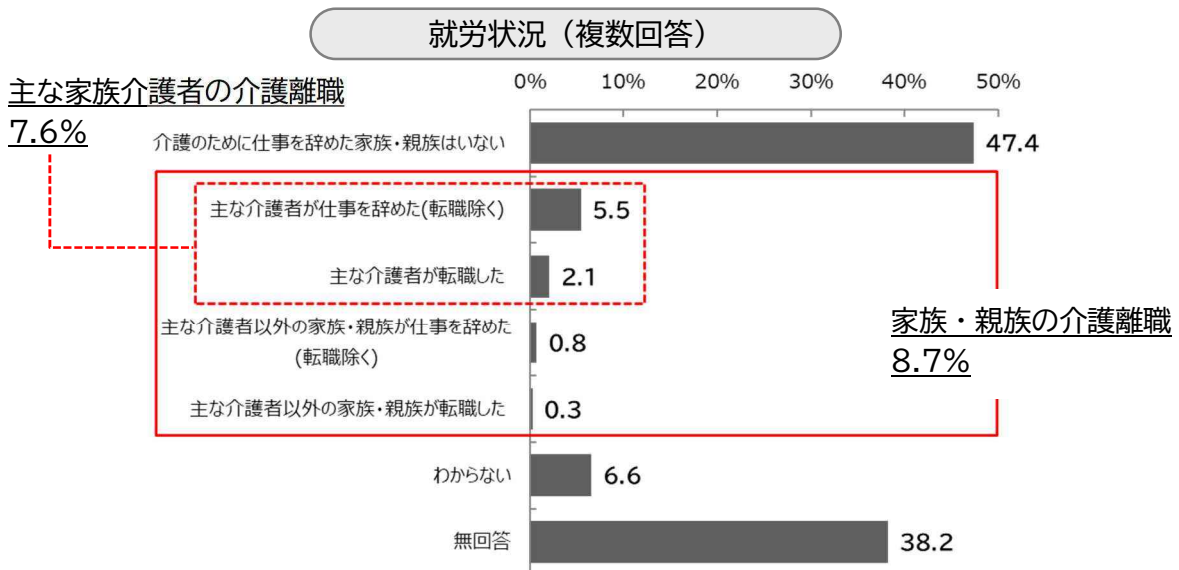
介護者支援として重要なことについては、「ショートステイなど、家族介護者が介護から離れることができるサービスの充実」が45%を超え、レスパイトのニーズが高いことがわかります。



資料：札幌市保健福祉局「要介護（支援）認定者意向調査」（令和4年度（2022年度））

◆介護離職している家族介護者が1割弱

主な家族介護者が介護を理由として、過去1年間に離職または転職した割合が7.6%、その他の家族・親族も含めた家族介護者全体の介護離職は8.7%となっており、介護離職者が一定数いることがわかります。



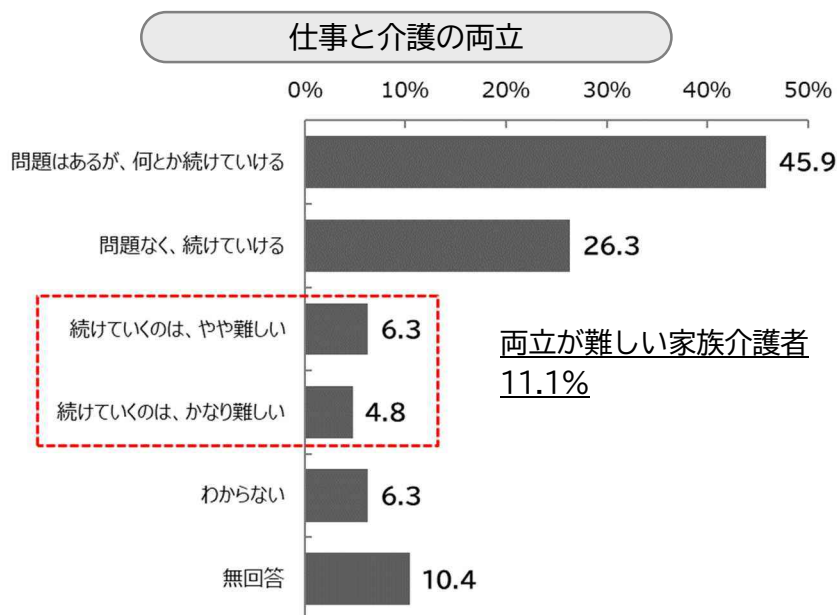
資料：札幌市保健福祉局「要介護（支援）認定者意向調査」（令和4年度（2022年度））

¹⁰ 一時的な中断や小休止を表す英語で、介護をしている家族が一時的に介護から解放され休息を取れるようにする支援

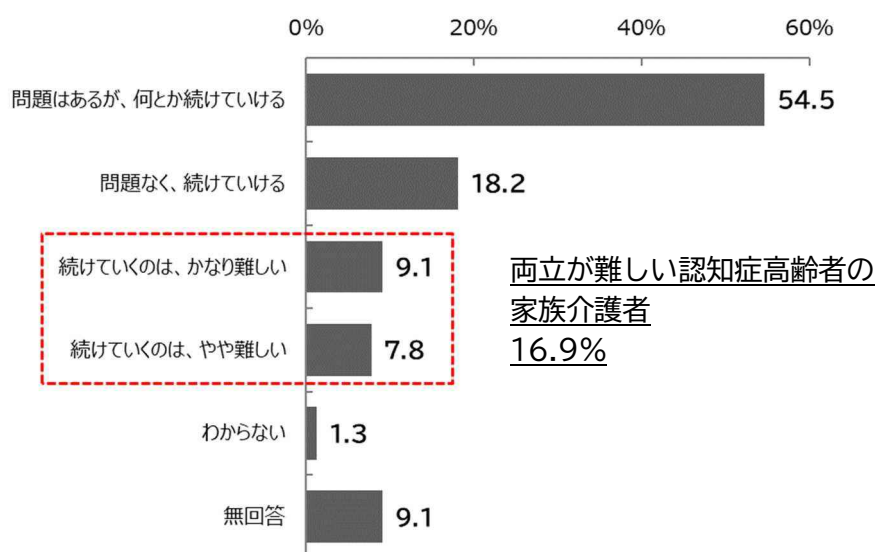
第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆家族介護者の1割弱は介護と仕事の両立が困難

現在就労中の家族介護者における介護と仕事の両立については、約7割が今後も働きながら介護を続けていけるとしている一方で、「続けていくのは、やや難しい」、「続けていくのは、かなり難しい」の合計が11.1%となっており、介護と仕事の両立に困難を感じている方が一定数いることがわかります。



特に、認知症の方の家族介護者では両立は難しいと感じる方が16.9%に増加しており、仕事を続けながら認知症の方を介護することの難しさわかります。



※ 対象は、「認知症（アルツハイマー病など）」を現在治療中、または後遺症のある方の家族介護者
資料：札幌市保健福祉局「要介護（支援）認定者意向調査」（令和4年度（2022年度））

2 今後の課題について

- 近年、少子高齢化や核家族化の進展といった社会構造の変化により、家族介護を取り巻く課題が多様化しており、1人の家族介護者にかかる負担はより一層大きくなることが見込まれています。

家族介護者の約6割を60代から80代の方が占めており、特に老々介護などを行う介護者自身の心身の負担が懸念されることから、適切なケアマネジメントのもと、必要なサービスを適時に提供することが重要です。

- 介護に関する悩みや困り感を外部の支援機関ではなく、家族内で解決しようとする方も一定数おり、家族介護者の孤立感を深めることにもつながりかねないため、介護に関する悩みや困り感を家族で抱え込まないよう気軽に相談できる相談支援体制の充実強化に努めるとともに、地域で支える仕組みづくりを進めていくことが必要です。

第5節 認知症高齢者の状況

1 現状について

◆高齢者の9人に1人が認知症

令和5年（2023年）10月1日現在、札幌市の要介護等認定者に占める認知症高齢者※（「認知症高齢者の日常生活自立度」Ⅱ以上の高齢者）は59,859人であり、高齢者の約9人に1人が認知症という状況です。

※ 認知症高齢者の考え方

要介護等認定を受けている方のうち、主治医意見書に記載されている日常生活自立度がⅡ以上の方を認知症高齢者としています。

- ・日常生活自立度Ⅰ・・・何らかの認知症を有するが、日常生活は家庭内及び社会的にほぼ独立している状態
- ・日常生活自立度Ⅱ・・・日常生活に支障をきたすような症状・行動や意思疎通の困難さが多少見られても、誰かが注意していれば自立できる状態
- ・日常生活自立度Ⅲ・・・日常生活に支障をきたすような症状・行動や意思疎通の困難さが見られ、介護を必要とする状態
- ・日常生活自立度Ⅳ・・・日常生活に支障をきたすような症状・行動や意思疎通の困難さが頻繁に見られ、常に介護を必要とする状態
- ・日常生活自立度M・・・著しい精神症状や問題行動あるいは重篤な身体疾患が見られ、専門医療を必要とする状態

高齢者人口に占める認知症高齢者の割合は、65歳～69歳の場合は1.1%ですが、年齢が高くなるほど上昇し、90歳以上では49.2%に達し、おおよそ2人に1人が認知症という状況です。

高齢者人口に占める認知症高齢者の割合【年齢別】

年齢区分	割合
65歳～69歳	1.1%
70歳～74歳	2.7%
75歳～79歳	6.0%
80歳～84歳	14.0%
85歳～89歳	28.3%
90歳以上	49.2%

資料：札幌市保健福祉局（令和5年（2023年）10月1日現在）

また、要介護等認定者に占める認知症高齢者の割合を見ると、要介護度が高いほどその割合が高い傾向にあります。

要介護等認定者に占める認知症高齢者の割合【要介護度別】

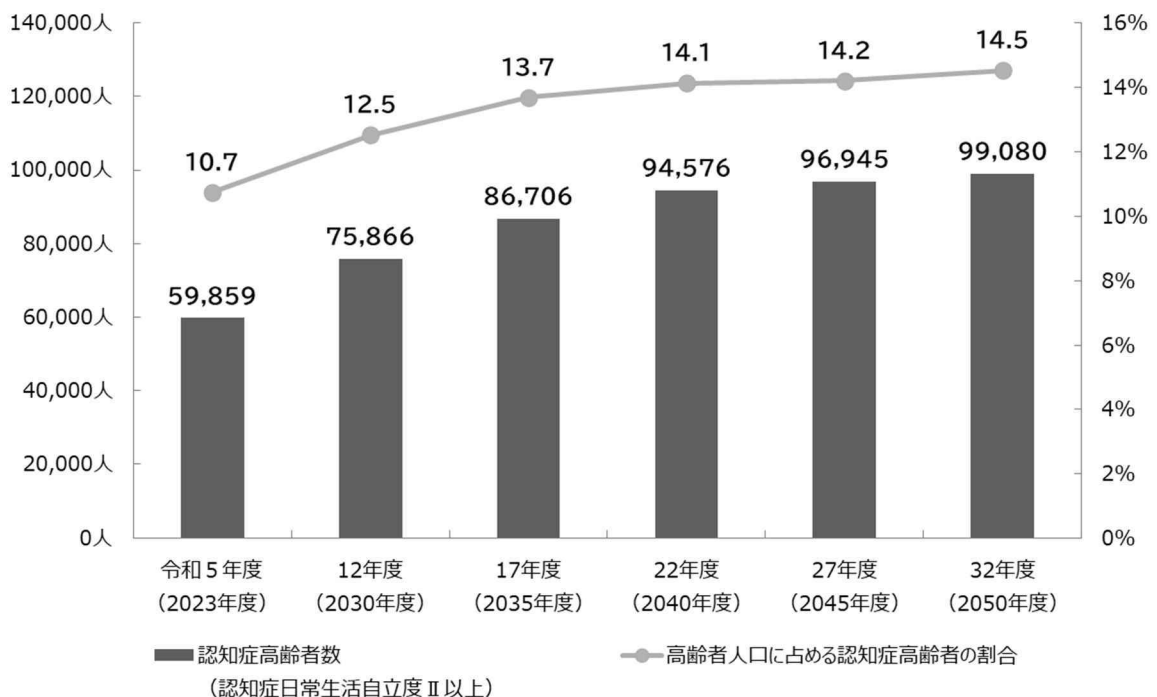
要介護度	割合
要支援1	14.3%
要支援2	12.5%
要介護1	64.8%
要介護2	65.2%
要介護3	78.9%
要介護4	84.2%
要介護5	89.1%

資料：札幌市保健福祉局（令和5年（2023年）10月1日現在）

◆2050年には認知症高齢者がさらに増加

高齢化の進行に伴い、認知症高齢者は年々増加していくことが見込まれ、令和32年（2050年）には、高齢者のおおよそ7人に1人が認知症という状況になる可能性があります。

認知症高齢者数及び高齢者人口に占める割合の将来見通し

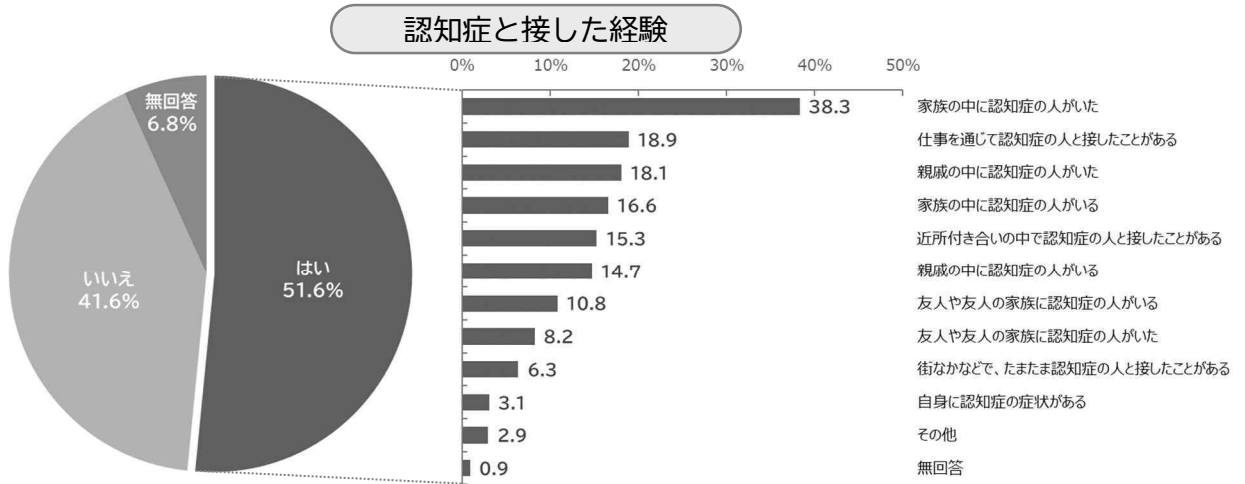


資料：札幌市保健福祉局推計（各年10月1日現在）

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆認知症と接したことがある方が約半数

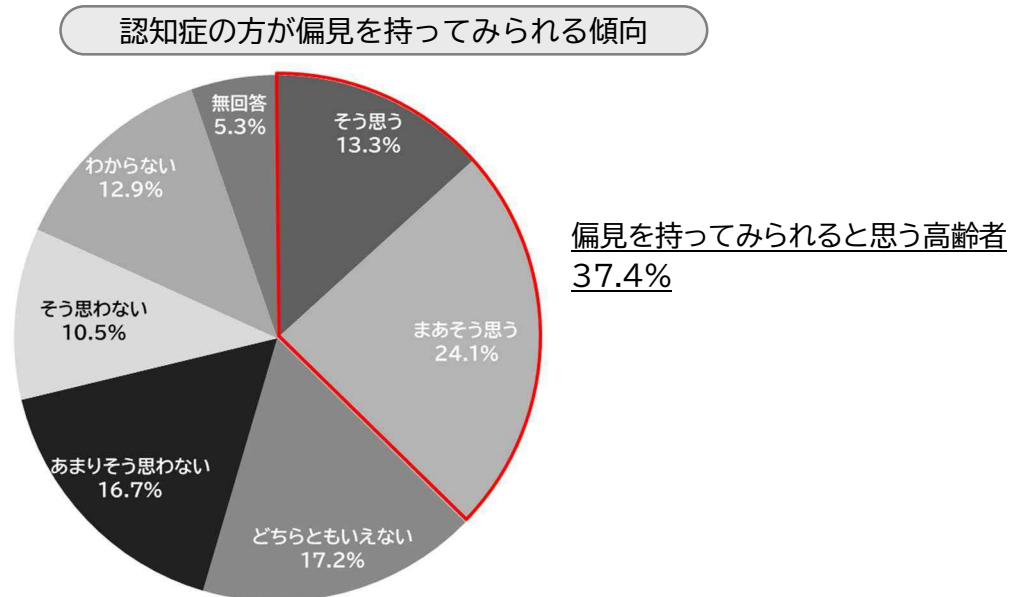
40歳以上の市民の約半数は認知症の方と接したことがあり、うち4割近くは「家族の中に認知症の人がいた」と回答しています。



資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

◆認知症の方は偏見を持たれやすい傾向

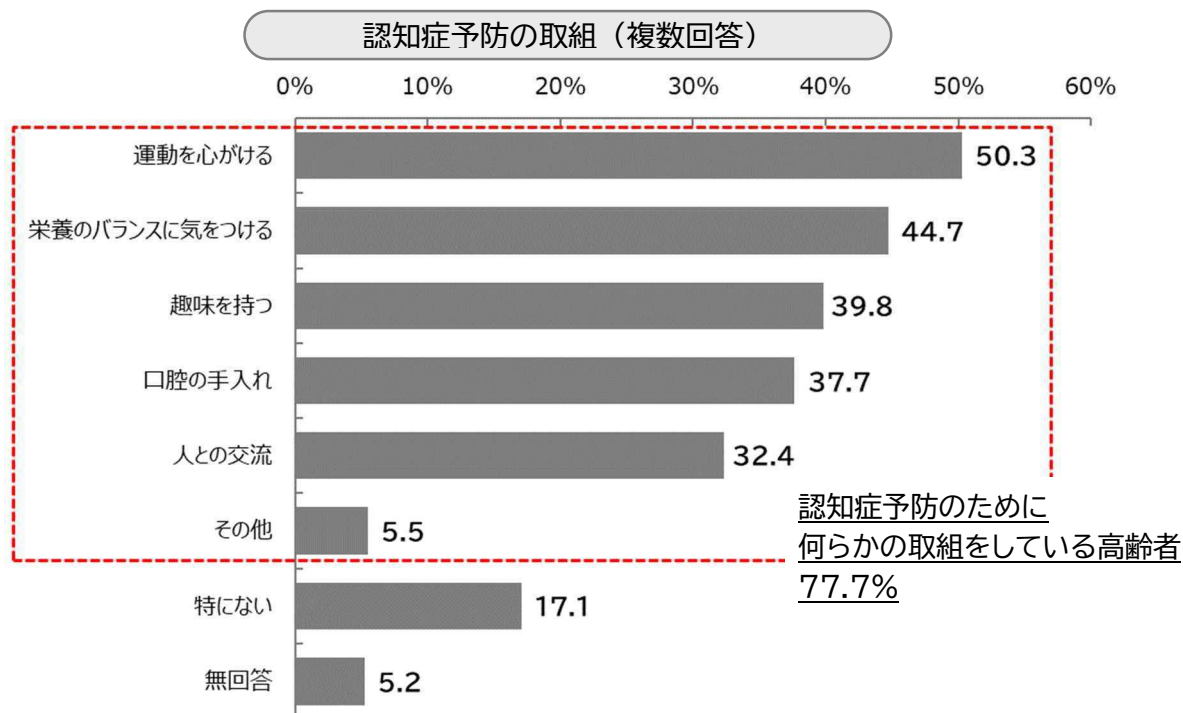
認知症の方が偏見を持ってみられる傾向については、「そう思う」、「まあそう思う」の合計が37.4%と、40歳以上の市民の約4割が偏見を持たれる傾向にあると感じていることがわかります。



資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

◆約8割の高齢者が何らかの認知症予防に取り組んでいる

認知症予防のために取り組んでいることについては、「特にない」が17.1%に留まり、77.7%の方が「運動を心がける」、「栄養のバランスに気をつける」、「趣味をもつ」など何かしらの認知症予防に取り組んでおり、認知症予防に関心の高い市民が多くいることがわかります。



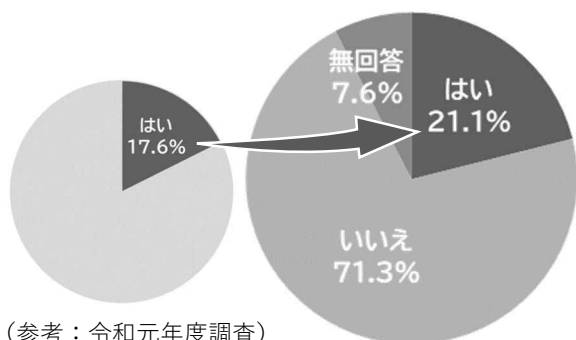
資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査（65歳以上）」
（令和4年度（2022年度））

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆認知症の相談先は約半数が医療機関

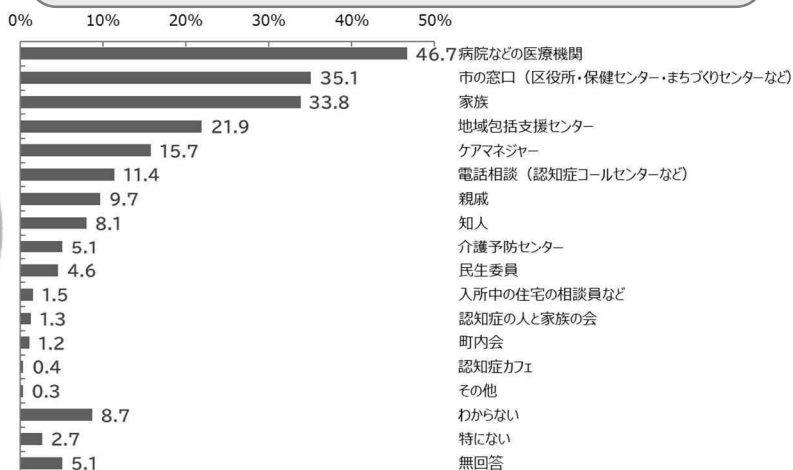
認知症に関する相談先の認知度は21.1%と前回調査時よりも高まっていることがわかります。また、自分自身や家族に認知症の心配がある場合の相談先については、「病院などの医療機関」が46.7%と最も多く、次いで「市の窓口（区役所・保健センター・まちづくりセンターなど）」が35.1%、「家族」が33.8%となっています。

認知症の相談先の認知度



(参考：令和元年度調査)

認知症の心配がある場合の相談先（複数回答）

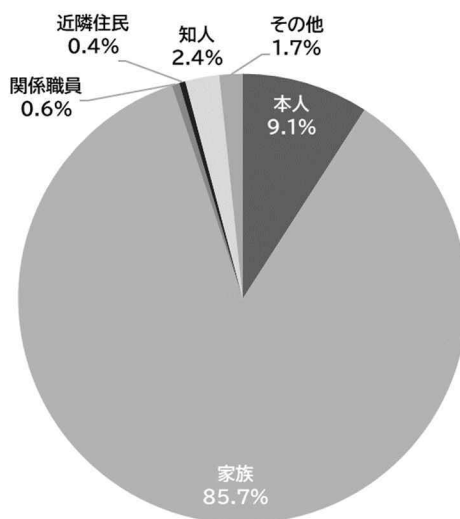


資料：札幌市保健福祉局「高齢社会に関する意識調査」（65歳以上）
（令和4年度（2022年度））

◆家族や本人からの相談が9割以上

令和4年度（2022年度）の認知症コールセンター¹¹の利用状況を見ると、家族からの相談が全体の9割近くを占めています。

認知症コールセンターの利用状況（相談者内訳）



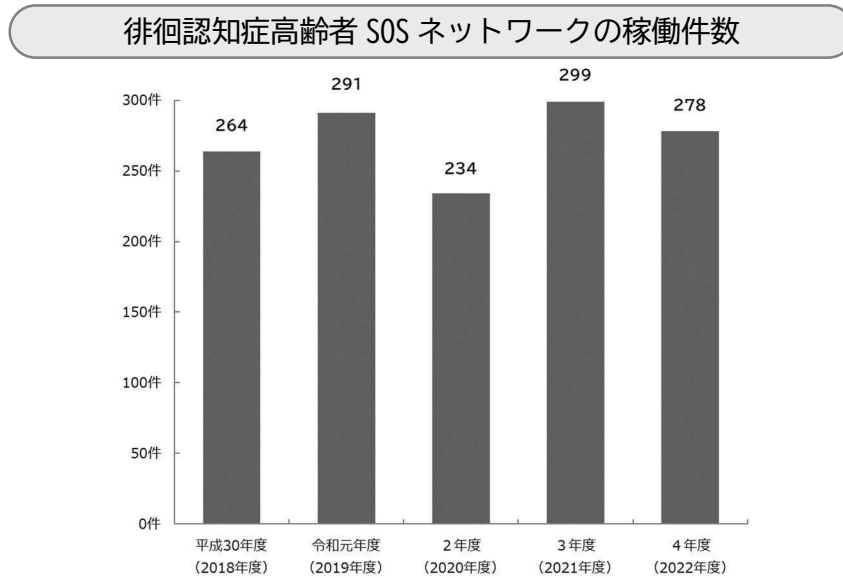
※ 令和4年度利用件数
898件の内訳

資料：札幌市保健福祉局

¹¹ 介護支援専門員や認知症介護従事者等の専門職が、専用電話により認知症に関するさまざまな相談対応や情報提供などを行う窓口

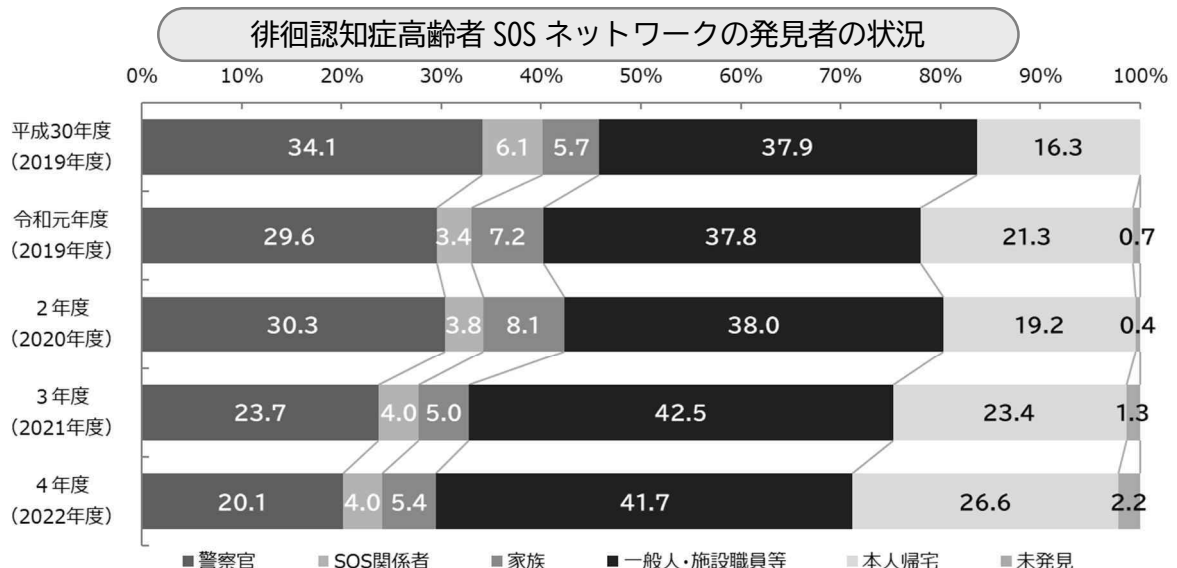
◆地域の見守りで徘徊認知症高齢者を早期に発見

徘徊認知症高齢者SOSネットワーク¹²による捜案件数は、過去5年の平均は約270件です。



資料：札幌市保健福祉局

また、発見者の内訳は「警察官」が約2割、「一般人・施設職員等」が増加傾向で4割超と、地域の目が早期発見につなげるための重要な役割を担っていることがわかります。



※ SOS関係者とは
消防局、各消防署、ラジオ放送局、タクシー・地下鉄等の公共交通機関、市内の集配郵便局などの捜索協力関係機関のこと

資料：札幌市保健福祉局

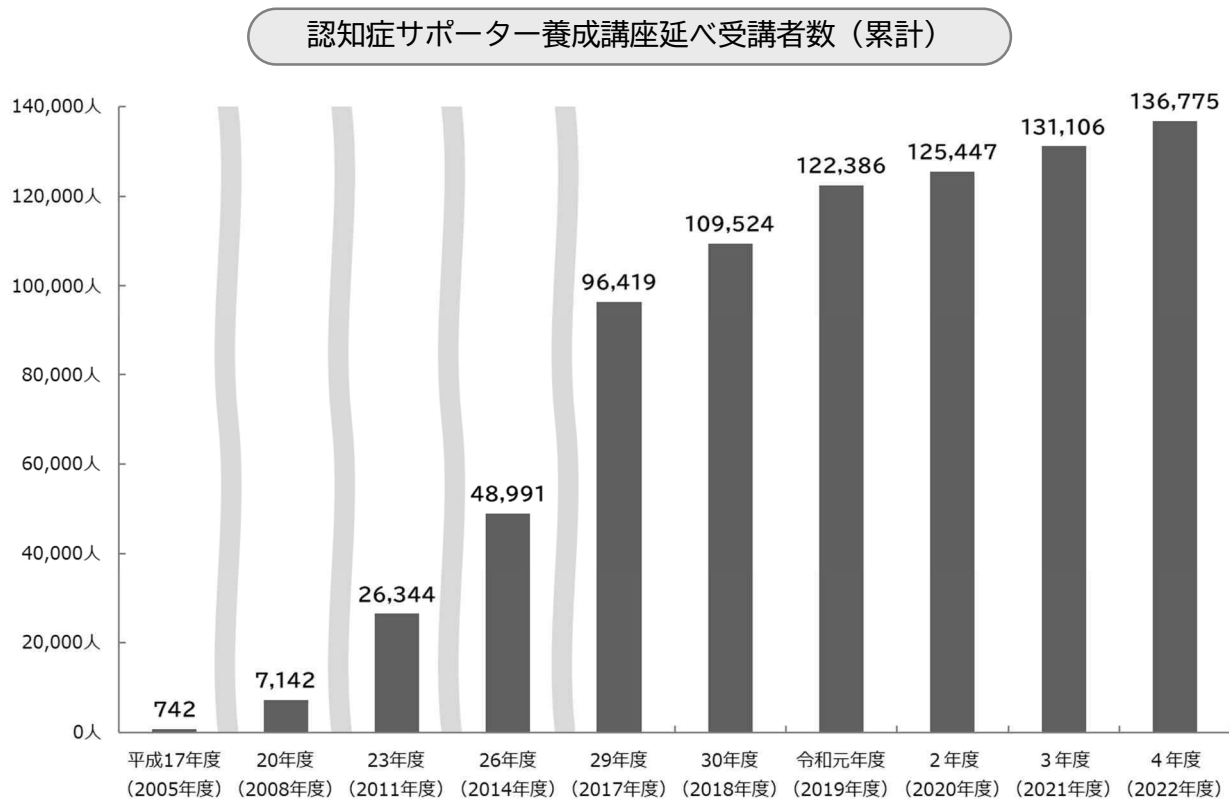
¹² 徘徊等で行方不明となった認知症高齢者を、北海道警察が主体となり速やかに発見・保護し、その後各種相談や必要な保健福祉サービスの情報提供を行い、認知症になっても地域で安心して暮らせるよう支援するもの

第3章 高齢者を取り巻く現状と課題

◆認知症サポーターは年々増加

令和4年度（2022年度）末までに累計13万人を超える方が、認知症サポーター¹³養成講座を受講しており、認知症について正しい知識を持つ市民が着実に増えています。

近年は、小中学校などの教育機関や企業での受講者も増えており、地域全体で認知症の方を支える機運が高まっています。



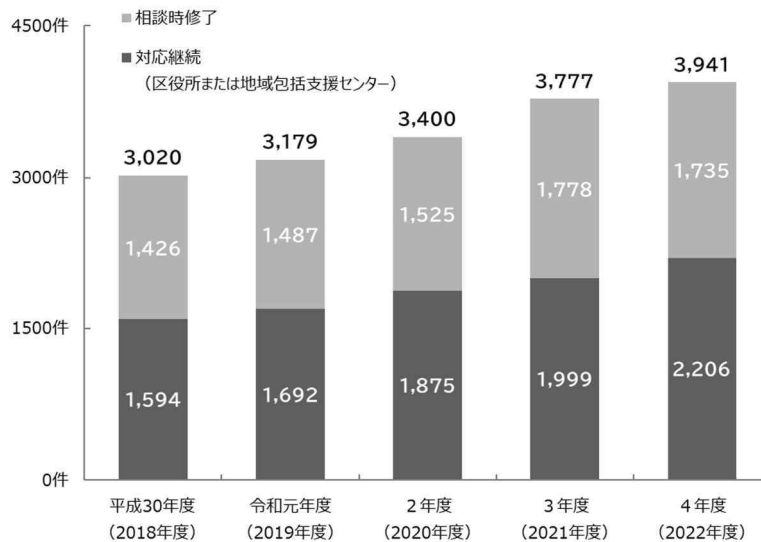
資料：札幌市保健福祉局

¹³ 札幌市が平成17年度（2005年度）から実施している認知症サポーター養成講座を受講し、正しい知識を持って、認知症の方とその家族を地域で見守り支える方

◆症状が進行してからの相談対応が多い

区役所や地域包括支援センターにおいて対応する認知症の相談件数は年々増加しており、相談対応の継続件数も増加しています。認知症の症状が進行してからの相談は継続支援が必要となるケースが多くなる傾向にあり、より早期の段階からの相談・支援が必要です。

認知症相談件数と継続支援の状況

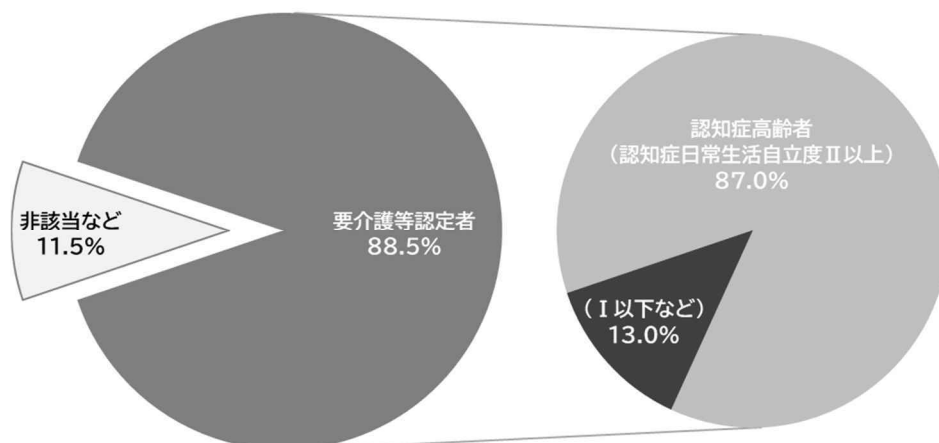


資料：札幌市保健福祉局

◆高齢者虐待の被虐待者には認知症高齢者が多い

令和4年度（2022年度）における高齢者虐待の被虐待者のうち、要介護等認定者が88.5%、そのうち認知症高齢者が87.0%を占めています。認知症のさまざまな症状は介護負担が大きいいため、介護者も含めた支援が必要です。

高齢者虐待の被虐待者の状況



※ 令和4年度虐待認定者数 87 人の内訳

資料：札幌市保健福祉局

2 今後の課題について

- 今後後期高齢者の割合が増加することに伴い、認知症高齢者の増加が見込まれますが、認知症に対して偏見をもって見られる傾向があるため、市民ひとり一人が認知症を我が事として捉えることができるように市民理解を進め、認知症の方の生活におけるバリアフリー化を推進していくとともに、認知症の方が尊厳を保持しつつ希望をもって暮らすことができるように共生社会の推進に向けた取組を充実させる必要があります。

- 認知症予防に関心が高いことから、市民が認知症予防に取り組むことができるように適切な情報提供等を継続するとともに、認知症になっても孤立せずに安心して暮らすことができるように社会参加の機会を確保する取組や権利利益の保護を図る取組が必要です。
また、認知症の症状が進行してから支援につながることも多く、認知症に関する相談先の認知度が低い状況などから、負担を抱えやすい認知症の家族介護者への相談体制の充実を図ることや、認知症サポーターの活動を活性化し地域での支援体制の充実強化を図る必要があります。

- 認知症の相談先として医療機関を挙げる方が多く、診断後の支援など、個々の認知症の方の状況に応じた良質かつ適切な保健医療サービス及び福祉サービスを切れ目なく提供できる支援体制を整備するとともに、介護保険事業所等の職員の認知症に関する介護サービスの質の向上を図ることが必要です。